

箱清水遺跡 (2)

1984・3

長野市教育委員会
長野市遺跡調査会

序

2000メートルを越す山なみにとり囲まれるように開けた長野盆地は、地形的にも他所からの影響を受けにくく、ここに住んだ人々も生活の中から独特の文化を生み育てて来ました。人がこの地方にその足跡をとどめて2～3万年の歴史を数えられると考古学は究明しましたが、その間の自然との厳しいかかわりの様子を知るためには、更に多くの研究の結果を待たなければなりません。しかし、寒波や襲来する台風などと遭遇しながら、四季折々くりかえして来た先人の努力の結果が、ムラをつくり、地方のクニをつくり、やがて広い地域が一つの文化圏として国づくりに参画して来たことは、十分に推察できます。

なかでも、明治時代から箱清水式土器の標準遺跡として注目されて来た当該遺跡の調査については、その国づくり、弥生時代の文化究明のため多くを望まれて来たところでした。

しかるに、長野高等女学校から現在の長野西高等学校にいたる同校の敷地内に占地されていたことにより、乱開発をまぬがれるとともに、反面、建造物に接する地点での調査を不可能として来たのでした。今回、校舎の改築計画が進み、その建物下とその周囲の調査が必要となり、前後3回に及ぶ発掘調査となったものです。

本来、埋蔵文化財の発掘調査については、文化財保護の立場から必要最少限度に止めるとともに、十分な学識と周到な調査技法を駆使して実施すべきものですが、時代の雄勢として教育施設の充実を計る目的の下、万止むを得ず調査となったものです。この調査は、長野市教育委員会の要請により組織された長野市遺跡調査会が当たり、調査の結果を「長野市の埋蔵文化財 第15集 箱清水遺跡(2)」として公刊いたします。この調査をもって当遺跡の大よその地域の調査は終了したこととなり、これまでの調査の結果はすべて報告書として公刊するとともに、記録保存の責を果たしたことになりました。

これまでご協力いただいた関係各位はじめ学術調査のため直接参加された調査会・調査団の皆さんに深謝申し上げます。

昭和59年3月

長野市教育委員会教育長

長野市遺跡調査会長 中村 博二

例 言

1. 本書は昭和58年度県立長野西高等学校体育館建設事業にともなう緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は長野県教育委員会と長野市教育委員会との契約に基づき、長野市遺跡調査会に委託され、調査会が調査団を編成して実施した。
3. 資料整理は調査員が分担し、担当は下記のとおりである。
遺物整理・実測・拓本(中殿・横山・青木)、図面整理・トレース(青木)、写真(山口)
4. 遺物番号は図・図版ともに合致している。
5. 各章の執筆分担は文末に文責を記した。なお第2章第1節は和田博氏(長野市立博物館専門主事)に御執筆いただき、第2章第2節は宮下健司氏(長野県史刊行会専門主事)、第4章第3節は桐原健氏(長野県史刊行会専門主事・遺跡調査会委員)に玉稿を賜った。
6. 調査の諸記録及び遺物は長野市立博物館において保管している。
7. 本書の作成においては青木・矢口が総括し、編集・印刷関係の業務は長野市教育委員会が担当した。

目 次

序	
例 言	
第1章 調査にいたる経過	1
第1節 長野西高校舎改築事業	1
第2節 調査会及び調査団	1
第2章 箱清水遺跡と箱清水式土器	4
第1節 遺跡の地理的環境	4
第2節 箱清水式土器研究史	7
第3章 調査内容	11
第1節 調査経過と調査概要	11
1 試掘	11
2 本調査	11
3 調査区南壁における土層序	13
4 調査区の旧地形	13
第2節 遺構と遺物	15
1. 住居址	15
2. 遺物	17
第4章 調査成果と課題	24
第1節 箱清水遺跡の範囲	24
第2節 箱清水式土器について	26
第3節 箱清水遺跡の意義	29
箱清水式土器関係文献目録	38
長野市出土箱清水式土器集成	42

挿図目次

第1図	長野西高校舎配置	3
第2図	遺跡周辺の地形	5
第3図	調査対象地及び地形	6
第4図	発掘調査範囲	12
第5図	調査区南壁土層断面図	12
第6図	調査区測量図	14
第7図	住居址実測図及び試掘時土層断面図	16
第8図	出土土器実測図	18
第9図	出土土器拓影	20
第10図	出土石器実測図(1)	21
第11図	出土石器実測図(2)・その他の遺物	22
第12図	原地形復元と遺跡の範囲	25
第13図	蒔田・玉置論文掲図土器	30
第14図	森森論文掲図土器	36

図版目次

第1図版	箱清水遺跡周辺の地形
第2図版	遺跡遠景、調査地近景
第3図版	試掘調査、試掘時遺構検出状況
第4図版	調査区表土除去、調査区全景
第5図版	調査区南壁の土層断面、断面接写
第6図版	住居址及び旧第3校舎基礎、住居址(東より)
第7図版	住居址(西より)、住居址柱穴及び炉
第8図版	住居址入口部分ピット、住居址内遺物出土状況
第9図版	調査スナップ
第10図版	長野高女造成工事、長野高女
第11図版	出土遺物(1)
第12図版	出土遺物(2)
第13図版	出土遺物(3)

第1章 調査にいたる経過

第1節 長野西高校舎改築事業

本遺跡の所在する長野県立長野西高等学校では、昭和55年度より4年計画で校舎改築事業が着手されており、新校舎第1号棟建設に先立って長野市教育委員会・遺跡調査会により同年7月に発掘調査が実施されている（長野市教委1981）。箱清水遺跡は本章で詳述されるとおり、長野西高校の前身である長野高等女学校の同地への移転建設により破壊を受けて今日に至るものであるが、55年度の調査（以下1次調査とする）では、遺物包含層及び遺構の残存が立証され、本遺跡の保存を展望する上で大きな成果があげられた。今回の調査は長野西高校舎改築事業の中で、旧第3校舎跡地における体育館建設に伴う第2次発掘調査である。

昭和58年4月、県教育委員会文化課を通し、事業計画が当長野市教育委員会にもたらされ、同20日県教委文化課・高校教育課、市教委社会教育課が現地協議を行なった。体育館建設予定地は第1次調査地から40m北に隔たった範囲であり、長野高女建設に伴う造成時に自然地形の改変が比較的少なかったと予想される位置にあたるため、施工予定地内を試掘調査し、着工に際しての保護対策に備えることとなった。

試掘調査は同年6月21日から24日まで実施され、南北方向の4本の試掘坑を設定した（第4図参照）。このうち西側の3本に関しては既に無遺物層まで削平されていることが明らかとなったが、施工予定地東端の試掘坑においては、上部が旧校舎等の攪乱を受けているものの、削平を受けず埋め立てられている遺物包含層及び遺構を確認するに至り、発掘調査による記録保存の必要性が認識された。

体育館建設事業は昭和59年11月完成を目指して9月着工が予定され急を要したが、試掘調査報告書提出後に再協議を経て、着工に先立ち発掘調査して記録保存することが決定され、同調査が長野市教育委員会・遺跡調査会に委託されることとなった。

第2節 調査会及び調査団

長野市遺跡調査会は、市内所在の埋蔵文化財等遺跡発掘調査の調整企画及び、それに基づく発掘調査・分布調査を実施し、その記録作成と発掘された文化財の保存活用について研究することを目的として設立されているもので、長野市教育委員会より委託を受け、各遺跡調査団を編成して調査を実施するものである。

調査会 会長 中村博二（長野市教育委員会教育長）
委員 米山一政（長野市文化財保護審議会会長）
桐原 健（長野市文化財保護審議会委員）
小池 淳美（長野市教育委員会教育次長）
関川千代九（長野市教育委員会文化財専門主事）
矢口 忠良（長野市立博物館主査）
監 事 関口 仁（長野市教育委員会庶務課長）

調査団 調査団長 矢口 忠良（長野市立博物館主査・日本考古学協会員）
調査主任 山口 明（長野市立博物館主事・日本考古学協会員）
調査員 青木和明（長野市立博物館主事）
中 殿 章子（長野県考古学協会員）
横山かよ子（長野県考古学協会員）

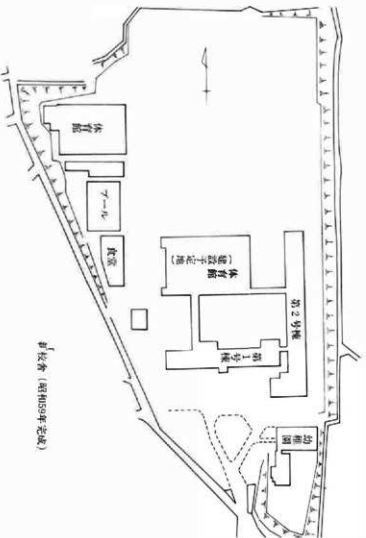
調査参加者 有賀淳一・土屋浩・長崎修・宮川洋一・森山嘉亮・山崎敬二（以上信州大学学生）・
青沼隆之・黒岩喜久子・輿水浩子・作藤昇仁・鈴木清子・関綱治・塚田雅二・戸
谷豊治・中川喜美男・西沢伸治・平塚五市・長野吉田高校地歴班（班長 前島卓）

事務局 事務局長 戸 津 幸 雄（社会教育課長）
事務局員 吉池 弘 忠（社会教育課長補佐）
早 川 理（社会教育課主査）
青木和明（博物館主事）

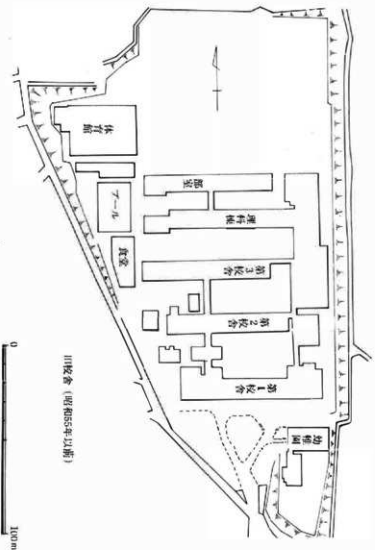
調査に際しては県教委文化課から指導助言を、長野西高校及び高校教育課から種々御配慮いただき、整理作業では長野市立博物館諸氏の協力を得た。また下記の方々より格別の御協力を賜っており記して感謝申し上げる。

市村勝巳（長野県考古学協会員）、桐原健（長野県史刊行会専門主事）、笹沢浩（飯山北高校教諭）、宮下健司（長野県史刊行会専門主事）、森嶋稔（上山田小学校教諭）、森山公一（日本考古学協会員）

（事務局）



主校舎 (昭和19年完成)



旧校舎 (昭和55年以前)



第1図 北野西高校舎配置 (1:2,000)

第2章 箱清水遺跡と箱清水式土器

第1節 遺跡の地理的環境

しぐれ沢と大峯沢にはさまれて△828.2の大峯山から東南の小丸山公園（標高482）に急傾斜で下る尾根が、さらに緩傾斜の丘陵を形成して約500mのび湯福神社附近に達する。

この丘陵本来の姿は往生寺台地と一連の舌状台地であったが、しぐれ沢から流下する湯福川の回春によって西側を面され、東側は約30mの比高差で落ちる箱清水凹地にのぞむ岬状丘陵となり、この先端附近に箱清水遺跡がある。しかし丘陵地の大部分は削平されて長野西高等学校が建設されているため原地形は著しく変えられ、当遺跡もその敷地内に包含されている。したがって当遺跡は、往生寺山・大峯山・地附山を背景にして南を受け、箱清水・善光寺を足下にして、湯福川・裾花川扇状地から沖積平地にまで広がる市街地を一望し得る標高約380m程の高燥台上に立地している。

明治34年長野高等女学校を現長野西高等学校の地に移転建設する以前は、丘陵上を戸隠参道が通じ、桑園を中心とした畑作地帯で高岡と呼ばれ、現在も高岡道南・高岡道北の地字が残されている。また箱清水式土器及び遺跡についての最初の発見紹介はこの工事の際であった。

高岡は往生寺台地と共に城山丘陵に連続する第四紀更新世の泥岩からなる豊野層を基盤としていいる。その上に裾花川の河床が今よりも30～40m高かった時期に、上松-城山-往生寺台地-夏目原貯水池附近一帯をおおった広大な旧裾花川扇状地の砂礫層があり、さらに往生寺崖錐や湯福川の押し出しが堆積している。これらの豊野層や裾花砂礫層の分布は、西長野-狐池-上松を結ぶ線と城山丘陵西側との活断層にはさまれて陥没して生じた善光寺地溝帯によって城山丘陵と断たれている（上水内郡地質誌）。

善光寺地溝帯の南半は新しい湯福川扇状地によって埋めたてられたが箱清水凹地は残存して湖沼化し、そこに形成された泥炭層を現在でも表土の下から検出することができる。箱清水遺跡に集落を構成していた弥生時代の人々もこの箱清水湿地に水田耕作を営んでいたと推定されているが、中世鎌倉時代の弘長3年（1263）に北条時頼が善光寺不断念仏料に寄進した深田郷は水田6町歩（約7ha）であった（信濃史料第4巻）。伝承によれば、その後近世初頭の慶長年間（1596～1615）に堰切沢を切り落として開田する以前は、ここに沼池が存在していたという（長野県町誌北信編）。近世の村を結ぶ往来は湯福-箱清水-滝を経て上松に至る地附山山脚を通じており、当時箱清水村の農民は約20haの水田を耕作していた。また、昭和10年代までは泥湿地が残され、周辺以外の中央部附近一帯は湿地地域で、この凹地のほとんどが現在見るような住宅地に変ったのはつい近年のことである。

（和田）



第2図 遺跡周辺の地形（1：20,000）

第3圖 調查村象地及地形 (1:5,000)



第2節 箱清水式土器研究史

はじめに

箱清水式土器は中部高地の弥生後期土器を代表するものとして、明治33年長野県立長野高等女学校（現長野西高校）敷地内で発見されて以来、多くの研究者によってとりあげられ、今日に至っている。一遺跡から何百個もの土器が焼米や麦とともに検出されたという劇的な発見は弥生土器研究の草創期において重要な役割を果たしたと言える。以下明治33年以後の箱清水式土器をめぐる研究史をⅤ期に分けて概観してみたい。

I期 箱清水遺跡の発見

箱清水遺跡が目ざされたのは、長野高女の建築工事に伴い出土した遺物を校長の渡辺敏氏が採集・保管したことに始まる。連絡をうけて明治34年9月はじめに坪井正五郎氏が米長し講演をした。なお、同じ9月4日には長野中学の野津左馬之助氏も調査し、出土土器を甲（朱塗）と乙（浮紋）に分類し、コロボックル人の製作物だと考察した手紙を坪井氏宛に送付している（文献2）。次いで坪井氏の命を受けた蒔田鎗次郎氏が同年9月19日に本格的な調査を実施し、その成果は一ヶ月後の『東京人類学会雑誌』180号に「長野市に於ける弥生式土器の発見」（文献1）と題して発表された。実測図を添えて台付、壙形、漏斗形、深皿形、瓶形と分類し、合わせて石器、黒塗り、糸切り底土器、焼き麦の出土を報じ、蓋はジャワ、ホルネオと一致し、遺跡の性格は土器製造場所としている（文献2）。遺物を実見してから一ヶ月に満たない発表の早さのうらに、膨大な資料に接した弥生土器研究者たる蒔田氏の心情が感ぜられる。

明治36年には鳥居龍藏氏と玉置繁雄氏が遺跡を訪れ、試掘（遺物は出土せず）し、翌年に玉置氏が「長野市で見た弥生式土器」（文献3）を発表している。氏は祝部土器が伴出することと近くに鎮まる水内神社から祭器説を提唱し、時期は祝部土器使用の末期とした。

その後、遺物は東京大学人類学教室へ移された一部をのぞいて昭和14年の学校火災で失われてしまった。石川祝氏が焼跡から再発掘して保管に当られたが、それとても現在は散失してしまっている（文献75）。

II期 箱清水式土器の位置づけ

該土器が千曲川流域にひろく分布していることに注目したのは八幡一郎氏が昭和9年に「北佐久郡の考古学的調査」（文献9）で郡内の土器を三型式に分類し昭和11年には神津猛氏が「岩村田の弥生式遺跡」（文献12）を報告された。同年藤森栄一氏が、「信濃の弥生式土器と弥生式石器」を発表し、この中で信濃の弥生土器を庄ノ畑式→荒山式→栗林式→高岡式→岩村田式→箱清水式と編年し、岩村田、箱清水式土器の櫛目文、丹塗、刷毛目に注意してA・Bに分類し、石器も新見解を示した（文献13）。この論文は中部高地の弥生文化を総合的に把握した初めてのもので、信

遺における弥生研究の出発点となった。

森本六爾・小林行雄氏編『弥生式土器聚成図録』（昭和14）の「中部高地」は藤森論考の総取編とも目すべきもので第Ⅰ～第Ⅳ様式にまとめ、第Ⅱ様式に壺形土器と櫛描文の盛行を上げ、箱清水・岩村田・御屋敷を代表遺跡として、位置づけている（文献16）。

Ⅲ期 編年の確立に向けて

戦後、神田五六・五十嵐幹雄氏による新資料の報告（文献18・19）があり、昭和31年になると桐原健氏が「信濃考古綜覧」で、櫛描手法の盛行をみる後期土器の原初形態として尾崎式土器を設定し、これに続く型式に箱清水式を当てた（文献30）。

藤森栄一氏は『弥生式土器集成』（昭和39年）で、信濃の弥生土器を第Ⅰ～Ⅳ様式に分類し、尾崎式と箱清水式を第Ⅳ様式に位置づけ、櫛描文と赤色塗彩の盛行する時期とした。そして、箱清水式土器は東日本系終末期弥生土器の一典型であることを強調した（文献40）。

Ⅳ期 発掘資料の増加と編年の再検討

昭和40年代に入ると開発に伴う緊急発掘により、新資料の増加をみた。

中野市安源寺遺跡では24基の土壌内より多量の後期土器が出土し、桐原氏は一括して箱清水式とし、安源寺Ⅱ類を箱清水Ⅰ式（尾崎式）、同Ⅲ類を箱清水Ⅱ式とした（文献45）。

更埴市生仁遺跡を調査した笹沢浩氏は安源寺Ⅲ類土器と比較し、両者の相違につき、一型式内における時間と空間の問題を提起した（文献51）。この後、笹沢氏は「箱清水式土器の再検討」の中で、更埴市と中野市の間に位置する長野国鉄貨物基地遺跡資料の検討を通して、安源寺Ⅲ類土器をもって箱清水Ⅱ式の概念とすることに疑問を発すると共に変形Dは畿内の第Ⅴ様式の性格をもち、箱清水式土器の消長はこのDを介して考えられるとした（文献55）。

さらに、笹沢氏は「箱清水式土器発生に関する一試論」で新しい櫛描文と赤色塗彩の施文手法が中期終末の土器に影響を与えて、吉田式を生み出し、この型式が箱清水Ⅰ・Ⅱ式の直接母体であるとした（文献56）。又、桐原氏は「北信濃後期弥生式土器」の中で、改めて箱清水Ⅰ・Ⅱ式を設定し、安源寺Ⅲ類がⅠ式、生仁Ⅴ8号住及び北長野国鉄貨物基地遺跡出土土器が、箱清水Ⅱ式に含まれるとしている（文献60）。

Ⅴ期 地域編年の確立に向けて

笹沢氏は「上水内郡誌」の中で、御屋敷Ⅱ1号住土壌出土の一括資料を御屋敷式と設定し、箱清水式を継承するものとした（文献83）。氏は翌年「弥生土器——中部・中部高地3」で氏の従来の後期弥生土器研究を整理して、吉田式→箱清水式→御屋敷式と編年している（文献93）。

昭和50年代に入って千曲川水系の上・中・下流域で良好な遺跡の調査が相次ぎ、地域編年の必要性が重視されるに至った。昭和55年になって、臼田武正氏は「佐久地方の後期弥生式土器について」を発表し、千曲川上流の佐久地方の後期弥生式土器を分析し、第Ⅰ類～第Ⅳ類に分類した。そして、第Ⅱ類が箱清水Ⅰに類似し、第Ⅳ類を箱清水Ⅱ式に比定するとした。御屋敷式土器は汎千曲川水系的な土器でなく、限定された地域に核的に存在する過渡的な現象と考えている（文献110）。

また、太田文雄氏は千曲川下流飯山市、田草川尻遺跡を調査して、1・2号住出土土器をもって田草川尻Ⅰ、3号住出土土器をもって同Ⅱと設定した。1・2号住出土土器中、特に壺形土器は吉田式のそれに酷似するも甕形土器の特徴は箱清水式に近いとし、3号住出土土器は箱清水式に相当するものとしてとらえている（文献111）。

課題と展望

箱清水式土器の実体は長い研究史にもかかわらず未解決な点が数多い。残された問題の解決に当たっては資料蓄積が何よりで、それには新資料の発見も必要であろうが、既掘資料の一日も早い史料化が望まれる。また、土器については遺構、遺物の総体の中で把握し、その中で各器種の消長をうかがうという姿勢が必要であろう。

さらに、御屋敷遺跡にみられるような土器構成の問題では、その追求が一方は土器型式、一方では編年といった異なった編年基準に立脚して問題が複雑にしているきらいがある。考古学における時代区分論のあり方とも関連することなので、この間隙をどのように埋めていくのか、大きな問題である。S字状口縁をもつ土器など西方からの外来系土器の波及や東日本各地において系譜関係が辿れる土器の影響については、一地域や県境を越えた研究者間の交流が積極的に望まれる。昭和55年に実施したシンポジウム「栴檀文の系譜」（文献113）はその意図に沿ったものであったが、今後、同方向の研究をすすめると共に、当然のことながら土器の胎土分析や赤色塗料の分析等、自然科学の力をも借りた研究をも実施すべきであろう。

以上のような操作を踏まえつつ、千曲川上流・中流・下流という地域単位での編年を確立し、それを中軸とした対比の中で箱清水式土器の全貌は究められていくものとする。合わせて中南信地方の岡屋式、座光寺原式、中島式土器文化圏との交流が解明された時、箱清水式土器を表徴とした千曲川水系における箱清水文化の実体は明確化されるであろう。

（宮下）

箱清水式土器研究略史

年代	学会の動き等	発掘・調査	編 年	分 布	備 註	周辺・その他
1884(明17) 1892(明25)	東京発見町で土器発見 森田健次郎「発見式土器」 を記す					
1900(明33) 1901(明34)	箱清水遺跡の発見 坪井正五郎「箱清水遺跡 調査と講演」	雅道館の遺物採集				
1903(明36)	鳥井龍藏市長	9.4野津左馬之助の 調査 9.19 森田の調査	コロボツル人の使用土器 (野津) ジワ・ゴルキオの類似土 器(森田)		箱清水遺跡は土器製 造場(森田) 箱清水の土器は弥生 (玉置)	弥生の存在(森田)
1919(大 8)	森田健作・梅原末治「発 見式土器形式分類集成図 録」	鳥居・玉置繁雄の調 査	紀前時代の末期(玉置)			
1932(昭 7)				「新日式文様の分 布」(小林)		
1933(昭 8)	森本六衛「発見式土器研 究史」				発見式土器における 二表(森本)	
1934(昭 9)						
1936(昭11)		森島安一箱清水遺跡の 調査 神津猛吉村田遺跡の 調査	「北佐久郡の考古学的調査」 (八橋一郎) 庄ノ郷→成山→栗林→高岡 →岩村田→箱清水(森島)	分布図(森島)	「信濃の発見式土器 と発見式石器」 (森島)	「千曲川下流長峯・ 高丘の発見式石器」 (森島)
1939(昭14)	森本・小林行雄「発見式 土器集成図録」		岩村田と箱清水は併列型式 (森本・小林)			
1946(昭21)	登原道雄の発掘				「日本農藝文化の起 源」(森本)	
1948(昭23) 1950(昭25) 1951(昭26) 1953(昭28)	日本考古学協会成立 文化財保護法施行 手引出版発刊 大森山遺跡発掘	尾崎				岡山の合口遺物 (柳原)
1955(昭30) 1956(昭31)	『信濃考古紀要』発行	城ノ内	尾崎式→箱清水式(柳原)	二つの文化圏 (柳原)	「箱清水式土器にお ける赤色字跡の傾向 とその意義」(柳原)	
1959(昭34)					「発見式土器製作 技術に関する二・三 の考察」(比佐真)	原庄の木器(高橋杜)
1962(昭37) 1964(昭39)	長野県考古学協会成立 小林・村野五介「発見式 土器集成」	戸戸・須多々峯	尾崎・箱清水は併列様式 (森島)		「箱蓋を載める土器」 (柳原)	高丘の土埴・土盛 (豊井清次) 須多々峯の方形埴蓋 墓(高橋) 安楽寺の土盛墓(柳 原)山の沢(水峯光 一・樋口昇一)
1965(昭40)	長野県内緊急発掘増加					
1966(昭41)	新発田市分布調査	安楽寺				
1967(昭42)	文化庁発足		尾崎・箱清水を一括して箱 清水Ⅰ・Ⅱに分規(柳原)			
1968(昭43)	シンポジウム「発見式土 器の発源とその発展」	生仁			「手で持ち運ばれて きた土器」(柳原)	生仁のト骨(紀尾市 教典) 碓氷の西森墓(竹内 伸)
1969(昭44)		神水・城ノ内・西沢津	生仁・安楽寺日輪間地域・ 駒岡を区別にする (黄沢浩)	「発見式古説一 中野山系地帯」 (神村達)		
1970(昭45)	中央調査会開始		安楽寺遺物は箱清水Ⅱとす る(比佐真) 古田式を後期南平に設定し、 箱清水Ⅰ・Ⅱの前期(黄沢) 「柳原式土器」検討 (森島健)			
1971(昭46)		平楽平・西光坊・御 屋敷・西沢津				
1972(昭47)	箱文化課発足	一本駒・新田				
1973(昭48) 1974(昭49) 1975(昭50)	北陸新幹線ルート発表 文化財保護法改正	西一豊隆 山田原敷 神楽崎・吉田高校・ 城ノ内				
1976(昭51)		犀地・後沢・千曲高校	柳原式土器を箱清水式 の次に型式設定(黄沢) 古田式→箱清水式→柳原式 式(黄沢)			
1977(昭52)	大森貞雄 300 年	沼原川尻				箱清水の集落・後沢 (比佐真) 月明沢の人面年加工 品(西沢健児) 高丘地の集落(柳原 義典)
1978(昭53)		堀ッ屋・安楽寺			「中野高地型新編 文の系譜」(黄沢)	
1979(昭54)		箱田・藤ノ井遺跡群				
1980(昭55)	シンポジウム「柳原文の 系譜」	沼田堀日・清水田・ 下小平	純発見式土器の総説(黄沢) 佐久第一層説(白田武志)			
1981(昭56)	シンポジウム「箱清水式 土器をめぐって」	神楽川・バイパス地点・ 堀原川	新原川Ⅱ・Ⅲ(太田文雄)			

第3章 調査内容

第1節 調査経過と調査概要

1. 試掘

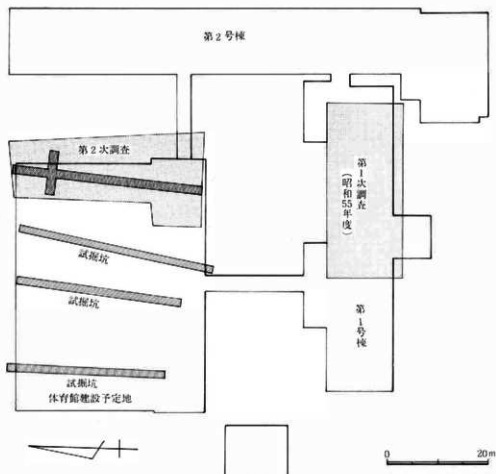
昭和58年6月21日から24日にかけて試掘調査を実施し、バックホーにより南北方向に4本の試掘坑を掘削後、遺物包含層及び遺構面の確認を行うこととした。試掘坑の掘削は調査地西側より開始したが、長野高女造成の際に表層が大巾に削平を受けており、現地表より深度1.5mに至るまで無遺物層である凝灰岩礫混入黄褐色土が観察され、地表に至る上部は整地等による攪乱層であった。ただし調査地東端に設定した試掘坑のみは、造成により削平の度合いが少なく、削平を免れた遺物包含層の残存が確認され、さらに同試掘坑北側において遺構らしき黒色土の落ち込みを検出したため、この部分に限り東西方向の試掘坑を直交させて設定し、その範囲を把握することとした。

調査地の現況は造成による土砂の切り盛りによりほぼ平坦に整地されているため、本来の地形の把握は推測の域を出なかったが、試掘の所見により同地点が南東に向かって伸びる舌状台地の中央部から東への傾斜が強まる位置にあたり、旧地形を削平埋め立てした接点の部分であることが判明した。検出された遺構は其中で埋め立てにより盛土された傾斜地に構築された竪穴住居址の可能性が高まった。

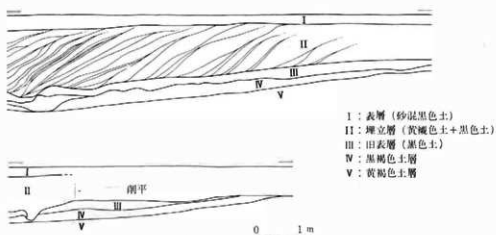
以上より調査対象地における造成時の削平は大部分に及んでいることが確認されたものの、東側の部分においては遺構及び遺物包含層が破壊を受けず保存されていることがほぼ確実となり、試掘坑内土層断面図作成の後、埋め戻しをもって次期発掘調査に備えることとした。

2. 本調査

試掘における所見から、体育館建設予定地1,400㎡中、東側部分300㎡以上の発掘調査が計画され、昭和58年9月10日より調査を着手した。対象地における西側の削平境界線を追いつながら東側の埋め立てによる盛土を可能な限り除去していくものとし、バックホーと人力を併用しながら掘削を行なった。旧地形の傾斜は予想をうわめて急であり、造成時盛土の堆積は厚く、発掘区東南隅においては2mを越える掘削深度となった。発掘区の旧地形が露呈されたのは9月15日であり、併行して遺構の検出作業を行なったが、旧第3校舎等の攪乱が著しく、確認できた遺構は試掘において位置が明確であった竪穴住居址1軒にとどまった。検出作業時における遺物の出土はわずかであるが、削平土による埋め立て層には比較的豊富に遺物が包含されており、造成時の削平により破壊された遺構に伴ったものと考えられた。遺構の精査は9月17日より開始したが、傾



第4図 発掘調査範囲 (1:750)



第5図 調査区南壁土層断面図 (1:80)

斜地であり、構築時の掘り込みによる住居址アランを検出するのに困難を伴い、東側斜面での壁及び床面を確認するには至らず、期待された遺物の出土も予想外に少なかった。9月19日以降記録作業に入り、同22日に調査区旧地形を測量し、埋め戻しをもって現場作業を完了した。

3. 調査区南壁における土層序(第5図)

調査区における土層序は、上部より長野高女造成以降の整地・攪乱による表層(I層)、造成時の削平・盛土による埋め立て層(II層)、旧地形の埋没層(III~V層)に大別される。

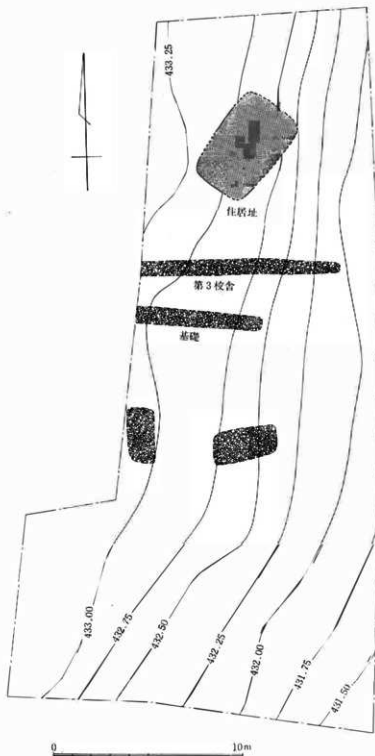
埋没層は旧地形における表土層(III層・おそらく畑地の耕作土)、遺物をわずかに包含する黒褐色土層(IV層)、遺物を包含しない地山としての黄褐色土層(V層)に分層される。このうちIV・V層には部分的に凝灰岩礫を多量に包含している。これら埋没層は標高432.8m付近以上が削平を受けており、調査区西端では最下のV層にまでそれが達し、同部分ではIII・IV層は失なわれている。

東側に向かうにしたがい厚い堆積をみせるII層は、西側部分の削平による土砂を用いて埋め立てられたものと予想され、旧地形の傾斜に沿って西から東へと順次埋め立てを進めたらしく、黒色土と黄褐色土が互層となって斜方向の縞状を呈しており、造成時の工事の実際を物語っている。なお、同層中には削平・盛土の際に土砂とともに移動した遺物が包含されている。

4. 調査区の旧地形(第6図)

検出された長野高女移転建設前の旧地形は、東南方向に下がる傾斜地であったことが確認され、調査終了時に検出面(V層上面)で25cm等高線による測量を実施した。測量図中433.00~433.25mラインより上面は削平されて旧状をとどめてはいない。検出された住居址はこの削平ライン上に位置しており、かろうじて破壊を免れたものであり、同ラインより上面に遺構が削平を受けずに残存する可能性はない。また調査区内では、住居址より下位には遺構を確認することができなかった。住居址付近の地形傾斜は約17度の勾配を有しており、居住域としては無理のある位置といえそうであり、本遺跡内の居住地としての範囲は既に削平されている部分を含んだ西側の台地中央部を中心として位置していることが予想され、今回検出に及んだ住居址はその東限界を示す可能性が指摘されよう。

(青木)



第6图 调查区测量图 (1:200)

第2節 遺構と遺物

1. 住居址(第7図)

形態及び構造

傾斜地に構築されており、北壁・東壁と床面の一部を確認していないが、検出部分から復原して長辺5.3m、短辺3.0~3.5mの長方形プランと推定される。検出面までの壁高は最大35cmをはかる。床面はやや軟弱であり、北東方向にわずかに下がる傾斜をもっている。柱穴は長軸3.0m、短軸1.5mの長方形に4本配置され、床面からの掘り込みは最大56cm、最小30cmとなっている。南壁際には東寄りの位置に2つのピットが存在する。床面からの掘り込みは51cmと34cmであり、その位置からして住居の入口施設に関連するものと予想される。炉址は北側の柱穴間中央に存在し、周辺の床面には炭化物の堆積が部分的に観察されている。炉穴は直径50cm、深さ7cmの楕円状であり、厚さ4cmほどの焼土層の上に焼土粒を混じた炭化物が堆積する。住居址中央部にも直径70cmの炭化物の堆積がみられ、炉穴の可能性も考えられたが、その堆積は薄く掘り込みも認められないため、常用された炉とは考え難い。

土層(試掘時土層断面図による)

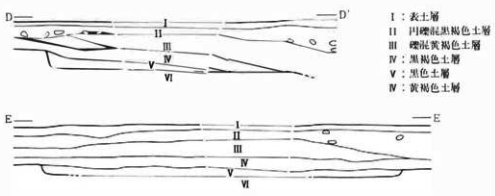
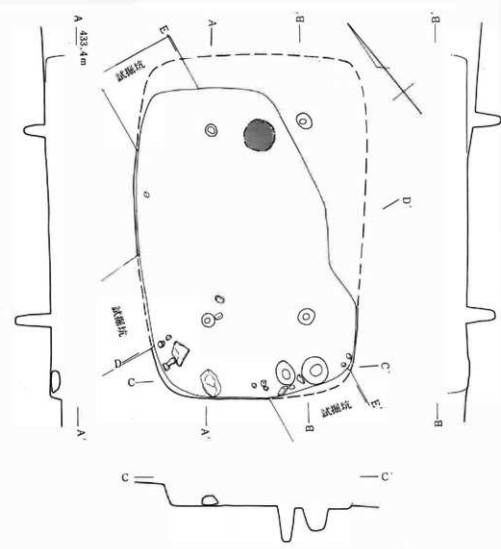
堆積土層はⅠ~Ⅵ層に分けられる。このうちⅠ~Ⅲ層は明治34年造成以降のものであり、造成時の埋め立て層はⅢ層と考えられる。Ⅱ層は拳大の川原石を包含しており、校舎建設等にかかわる攪乱層であろう。造成以前の表土は削平により失なわれているが、改変を受けていない自然堆積土はⅣ層以下となる。Ⅳ層は遺物包含層であり、わずかな遺物の出土がみられたが、遺物の包含は住居址覆土であるⅤ層に集中している。住居址の掘り込みは無遺物層であるⅥ層のみにおいて確認されている。

遺物

住居址内出土遺物としたものはⅤ層出土に限られる。土器は破片のみの出土であり総数約170点をかぞえる。このうち確実に遺構に伴うと認定されるものは高環形土器の大破片(第8図-4)のみであり、住居址西隅床面に押圧された状態で検出されている。その他の遺物としては敲石(第10図-1)、石鎌(第11図-1)、剥片類数点が出土している。また住居址南側の床面上には10数点の自然石が散見されたが、加工痕・使用痕を明瞭に有するものはない。

時代

出土した遺物の中で大多数を占める箱清水式期の所産であるとして大過なく、住居址形態も同期の典型を示すものである。



- I : 表土層
- II : 白礫混黒褐色土層
- III : 礫混黄褐色土層
- IV : 黒褐色土層
- V : 黒色土層
- VI : 黄褐色土層

0 2 m

第7図 住居址実測図及び試掘時土層断面図 (1:60)

2. 遺物

(1) 土器(第8・9図)

調査において出土した土器の総数は約420点である。約170点が住居址内からの出土であり、その他は検出面と埋め立て土層中から出土したものである。

① 箱清水式土器

壺形土器A(第8図-1・11、第9図-1~5・19~21)

頸部に櫛描T字文を施し、施文帯を除いた外面と口縁部内面とを赤色塗彩する。口縁部は朝顔形に大きく外反し、無果花形の胴部下半に屈曲を有する。

壺形土器B(第8図-2・3)

頸部に櫛描施文帯をもたず、口径15cm程度の小形品であり、外面と口縁部内面とを赤色塗彩する。口縁部は短く外反し頸部のくびれは小さく、甕形に近い形態を呈する。

高坏形土器(第8図-4~6・12)

坏部内外面及び脚部外面を赤色塗彩するものであり、口縁部形態から次の3種に分類される。

- a(4) 坏部上半に段を有して口縁部が外反するもの
- b(7) 口縁部が端部において屈曲し外反するもの
- c(5) 口縁部が直に立ち上るもの(鉢形土器となる可能性がある)

鉢形土器(第8図-6)

外面を赤色塗彩し内面をヘラミガキにより仕上げた小形品である。小破片のため全形は不明であるが、底部の突起が脚になると考えられ、類例のない異形品である。

甕形土器(第9図-6~15・22~32)

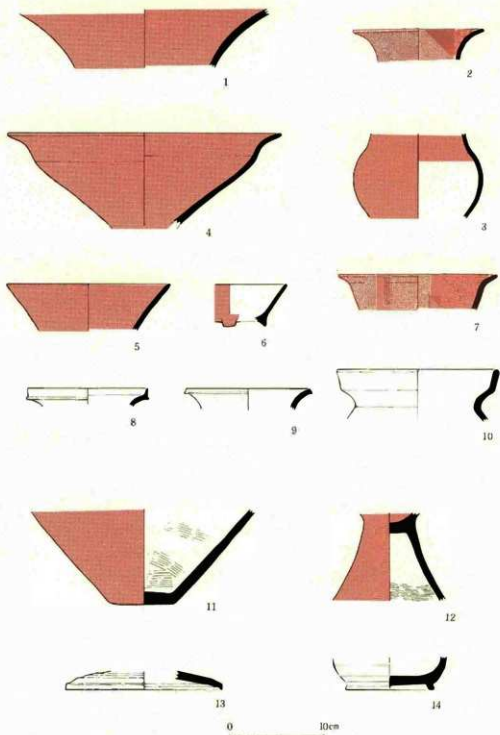
頸部に櫛描叢状文、口縁部から胴部中位にかけて櫛描波状文を施文するもので、施文部以外はヘラミガキにより整形されている。全形を知り得る破片はないが大小の形態があり、ともに頸部の屈曲が弱く、口縁部が長く伸びてゆるやかに外反する器形が予想される。

以上箱清水式と考えた土器群は約400点であり、出土土器の大多数を占める。その内赤色塗彩の施されたものは約250点、全体の%にあたる。

② 北陸系土器(第8図-8~10、第9図-16)

住居址出土土器中から分離されたもので、遺構外出土土器中には見い出せなかった。破片総数は2点であり、全て甕形土器とした。

口縁部破損はいわゆる受口状口縁を呈するもの(第8図-10)と端部にヨコナデによる面をつまみ出すもの(第8図-8・9)の2種が存在する。前者は口縁部内外面を丹念にヨコナデ整形しており、肩部にハケメがわずかに観察される。後者はヨコナデにより口縁端部に面をつくり出し、



第8图 出土土器实测图(1:4) 1~10 住居址, 11~14 道槽外

下部が突帯状となっており、1点は上方へのつまみ上げが著しく受口状口縁に近い形態を呈している。

胴部破片は肩部に横列の刺突文を施したものの(第9図-16)の他に、外面をハケメ、内面をヘラケズリにより仕上げた破片が存在する。その他北陸系とした土器破片は細片であるが、色調が箱清水式とは異質であり、それに比べて明褐色である。

以上の土器群と同系列の資料出土例は、県内では中野市安源寺遺跡(中野市教委1979)、飯山市柳町遺跡(桐原1959)等に散見され、その分布は北信地方に集中的である。その形態及び整形の手法は在地の箱清水式の中からは生じ得ないものであり、他地域からの移入の可能性が強く求められよう。「月影式」等に代表される北陸地方弥生末期以降の土器群には、本資料袋形土器と同様の形態・整形が特徴的に存在しており、隣県新潟においては内越遺跡(新潟県教委1983)、高塚B遺跡(西山町教委1983)等に類例を求めることができる。

本遺跡における北陸系土器の編年の位置づけに関しては、住居址内覆土中からの破片資料ということもあり、にわかには決することはできない。仮に住居址内箱清水式土器に共伴するものと把握しても、出土している箱清水式土器自体が断片的であるため、その認識は予測にとどまるものである。ただし、箱清水式期の段階で隣接地北陸系土器群の流入を否定する材料はなく、時間的にも可能性を残すものであり、北信濃における北陸系土器群の出現段階、両地域の編年対比という問題も含めて今後の検討が必要となろう。

③ 須臾器(第8図-13・14、第9図-33・34)

遺構外から出土したもので総数13点を数える。坏蓋(第8図-13)、坏(第8図-14)、甕(第9図-33・34)の他、ヘラケズリ痕を底部に有する坏破片がみられる。奈良以降の所産と思われ、同期の土師器坏破片も一点出土している。

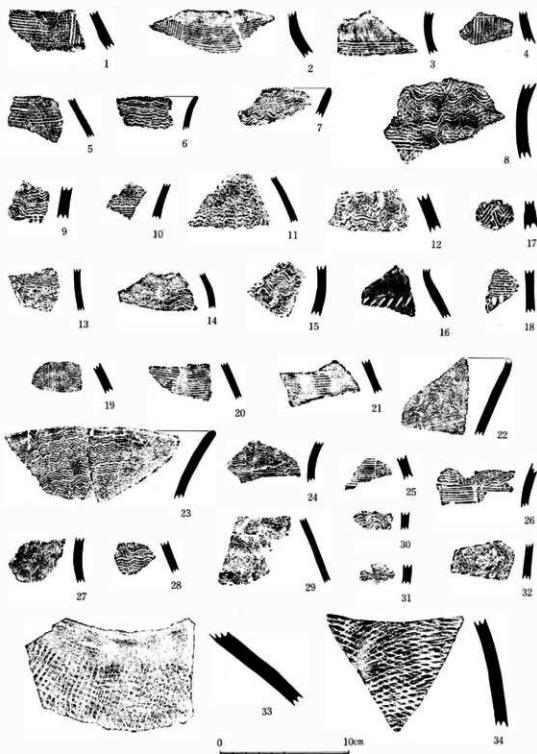
④ その他(第9図-17・18)

住居址内から出土したものである。17は半截竹管を用いた施文を有し、縄文中期初頭の所産と考えられる。18は櫛描文と刺突文を有し、弥生中期の所産と考えられる。いずれも小破片であり類似する資料の出土はみられない。

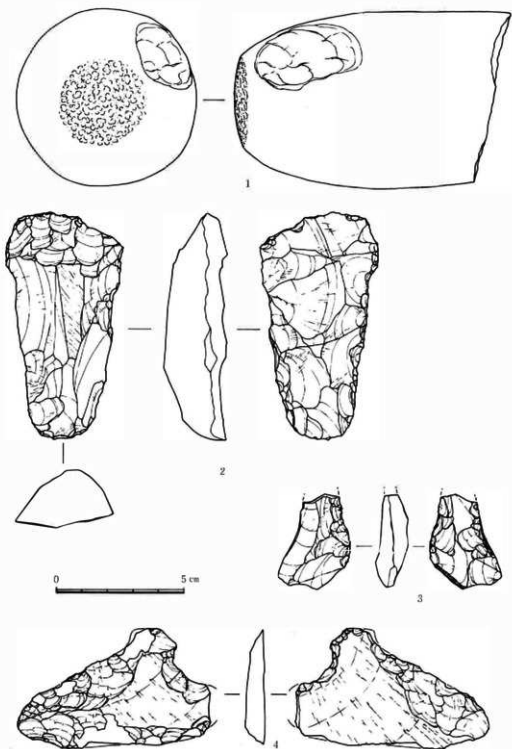
(1) 石器(第10・11図)

敲石(第10図-1)

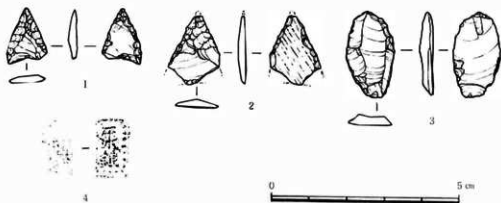
安山岩製の円筒状自然礫の一端を敲打面としたもので、使用時の打撃痕が明瞭である。使用痕の残された面の反対側は折損しており全形は不明となっている。使用面に近接して使用時の破損剥離がみられ、側面には火熱を受けて変色した部分が存在する。住居址内出土から弥生時代後期の所産である可能性をもつ。



第9图 出土土器拓影(1:3) 1~18 住居址、19~34 道槽外



第10圖 出土石器実測圖(1)(2:3) 1 住居址、2~4 遺構外



第11図 出土石器実測図(2)、その他の遺物(1:1)

1 住居址、2-4 遺構外

筥状石器(第10図-2)

珪岩製で両面加工により筥状に製作されている。刃部は片刃を呈し断面はカマボコ状となっている。東北地方に出土例の多い「石筥」「トランシェ様石器」(富原1976)に類似しており、縄文早期の所産である可能性をもつ。なお1次調査においては押型文土器破片が検出されている。

搔器(第10図-3)

珪岩製で先端部を折損し全形は不明である。両面加工による刃部を片側のみにもち、もう片側は先端部からの打撃による縦長剥離が片面にみられるが刃部は形成されていない。基部には稜皮をそのままに残している。

石匙(第10図-4)

サヌカイトに近似したガラス質の安山岩製であり、横長の三角形を呈する。剥片剥離面を両面に残し、底辺刃部は片刃を呈し片面のみの剥離により形成されている。

石鏃(第11-1-2)

1は珪岩製であり、二等辺三角形の基底部にゆるやかなえぐりをほどこしている。逆刺の一方は折損している。

2は黒曜石製であり、片面に稜皮をそのままに残す。先端部と基底部は折損しているが、ほぼ二等辺三角形を呈している。

小形剥片石器(第10団-3)

黒曜石製であり、縦長の小形剥片をそのまま用いている。刃部は片側に顕著であり、使用によるものと思われる微細な剥離がみられる。

この他剥片を含む石層が34点出土しており、黒曜石はその内24点を数える。また住居址内床面に検出された自然礫のうちに拳大の安山岩礫(剥離質)が存在しており、石器製作を目的として遺跡内に搬入された可能性を有している。

(3) その他の遺物

調査区内の上部掘乱層内からは明治期以降の瓦・棟瓦・陶磁器破片が多数出土した。これに混じって一朱銀(第11団-4)も発見されている。銅を含有するらしく、表面に緑青を生じている。

注) 石器に関しては宮下健司・森山公一氏、土器に関しては桐原健・笹沢浩氏の御教示による部分が大きい。

(青木)

参 考 文 献

- 桐原 健 1959 「北信濃長峰丘陵柳町遺跡調査概報」『信濃』9-12
富樫泰時 1976 「トランシェ様石器について」『東北考古学の諸問題』
中野市教育委員会 1979 『安源寺II』
新潟県教育委員会 1983 『内越遺跡』
西山町教育委員会 1983 『高塩B遺跡発掘調査報告書』

第4章 調査成果と課題

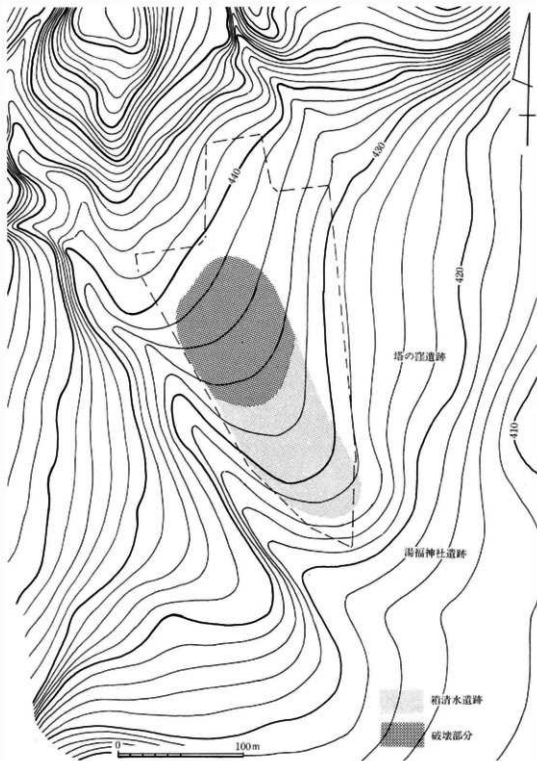
第1節 箱清水遺跡の範囲

箱清水遺跡は長野西高校敷地とはほとんど重なるものと考えられ、その現況は長野高女移転以来の造成と建設により旧来の地形が著しく改変されている。造成による破壊状況及び旧地形の把握は従来の推測域を出ていないが、今回の調査結果から、遺跡の遺存と範囲を部分的に確定し得る段階に至ったといえる。

長野西高校に保管されている長野高女造成時の写真(第10図版)をみると、トロッコを敷設して、舌状台地北側を大巾に削平し、その土砂を用いて東南側を埋め立てたことが知られ、調査においてはこの際の埋め立てを物語る盛土が検出され、東南方向の傾斜地がそれにより被覆されていることが確認された。造成時のこの埋め立て層は敷地東端では5mに達するものと考えられる。

旧来の地形をとどめた周辺部分と、今回の調査により露呈した旧地形の所見により、遺跡の立地する舌状台地の復原を試みたものが第12図である。台地の始まりは現在の校庭北端にあり、標高438mをはかる。台地の先端は現在幼稚園の所在する近辺であり、標高は426mをはかる。この台地の中心線では南北に標高差を10m以上もつものであるが、その勾配は3°程度のゆるやかなもので、台地西側を画する湯福川の水利にも恵まれ、集落地としては好適の立地条件といえよう。今回の調査地はこの中心線より20~30m東へ寄った地点にあたり、東への傾斜が強まり、勾配は6°を越えている。調査においても遺構は住居址1軒の検出にとどまっているため、集落地としてはその東限界に位置すると推定される。集落地の南限は台地の南端にまで及んでいると思われ、長野西高所蔵の遺物の中に校門前出土と伝えられるものが存在することもそれを裏づけている。このことから、集落跡としての本遺跡の範囲は、台地中心線に沿った東西70m、南北220mにわたる部分に設定することができよう。

以上のように推定された遺跡範囲のうち、既に長野高女建設に際して削平されて失われた部分は、調査対象地を含んだ北側の約半分の面積にあたる。標高では433mラインがその境界になっている。削平を受けずに埋め立てられた部分も、校舎等の建設によりある程度の破壊は免れなかったであろうが、なお多くの範囲に遺構が存在する可能性は高いと考えられる。また台地の下面には塔の窪遺跡、湯福神社遺跡が確認されている小段丘が存在しており、本遺跡が縄文早期から始まる複合遺跡であることを考えあわせれば、集落地以外としての遺跡範囲は、それらが包括された広い範囲に設定すべきであるといえよう。(青木)



第12図 原地形復元と遺跡の範囲 (1 : 3,000) (破線内は長野西高校敷地)

第2節 箱清水式土器について

箱清水式土器の発見に伴う報文は、本書第4章にみるごとく明治34年までさかのぼり、藤森氏による内容と時代比定は戦前のことである。^(註1)これらは、楠描文(楠目文)の裏・赤色塗彩される土器群に注目したもので、昭和31年に箱清水式土器と呼ばれるようになり、千曲川水系の弥生時代後期の一型式として現在に至っている。^(註2)しかし学史は古いが、その内容において本格的追求されるようになったのは、昭和40年代以降のことであるといっても過言ではあるまい。箱清水遺跡の発見が明治時代のことであり、学校敷地造成中に採集され、また現在その収集された資料が散逸してしまい、増々その内容を不明にしてしまったことに起因している。^(註3)そして箱清水式土器は他の型式と明瞭に区別することができるため、出土例が多く、型式把握が進んでいるとの印象を与えている。^(註4)そして最大の原因は、前記したものとあいまって、遺構の検出があまりにも少なかったことである。そのため遺構と出土資料の合致、資料のセット化、地域性の追求が不充分であったことは、いぬめない事実である。

こうした中でも土器研究が進んでおり、特に昭和57・58年には長野・群馬・埼玉各県の研究者を中心とした「楠描文の系譜」・「箱清水式土器」と題するシンポジウムが企画されるなど、この土器に対する評価が高まってきており、一種のブームとも呼べる程になってきている。各県共通の話題として追求されているのは、中部高地型楠描文と赤色塗彩土器を含む整形技法の問題、有段口縁(折り返し口縁)、頸部のしまりや口縁部形態、体部と底部とのあり方等の形態変化や推移の比較検討などに力が注がれている感があり、そしてこれらを媒介とした器種の識別とであった。このシンポジウムの成果は、不十分なながらも中部山岳地域と関東地方と共通の理解の上において該期の広域的な編年作業を進めるにあたって重要な示唆をもたらすものと思う。^(註5)しかし箱清水式土器自体をふりかえてみた時、中味は何んだらうかと疑問が湧いて来る。それは箱清水式土器を代表するセットとして上げる遺跡はいくつあるだろうか、箱清水式土器の確立期・隆盛期の土器の形態をどの器形に比定し、その変遷過程がどのように追えるのか、等々のことである。この問題に対する一応の答は、単独の遺構からまとまった供伴関係器種(セット)として把握されたのは、安源寺遺跡(中野市)土壌出土の一括土器群(安源寺第3類)、遺構が明確になっていないが国鉄車輛基地遺跡(長野市)出土の一括土器、生仁遺跡Y-8号住居址出土土器等により、編年的位置付けや土器内容が次第に明確になってきているといえる。これらの資料呈示により、箱清水式土器がより具体的にあきらかになってきた。それに加え近年では、千曲川上流の佐久盆地の発掘調査が進み、一本柳・餅田・西一里塚遺跡等々に該期の資料が増加し、長野市松代町では四ツ屋遺跡あり、地方においても田草川尻遺跡の内容が明確になってきている。^(註7)その内容は、千曲川水系全般をみつめながら地域の土器の洗い直し作業をしているように思う。こうした研究成果から、佐久地方における藤森氏が提唱した「岩村田式→箱清水式」を、また桐原氏がいう「尾

崎式→箱清水Ⅰ・Ⅱ式→柳町式」を再評価する必要があると思う。^(註9)即ち箱清水式土器とは、先学と同様に千曲川水系の土器と考え、確立期・隆盛期の前後の地方色を充分見極めた上で、そしてそれらを比較検討しながら確立すべきものとする。その基底になる資料として渡辺氏が提示した国鉄車輛基地遺跡出土のを用いたらどうだろうか。しかし残念ながら高坪が明確になっていない。

また、確立・隆盛期前後の問題があるが、前の問題については、吉田式土器およびその影響下にある土器が一定千曲川水系において普遍的に分布していることがわかりつつあり、一定の結着をみせている。^(註9)一方の後の問題については、客体における濃尾平野からのS字状口縁を持つ袋形土器の受け入れが、箱清水式土器に妥容をおこし、それがやがて解体し、古墳時代土器に統一されてくるとの考え方が、当地において一般的あり方として理解されている。^(註10)しかし今回の調査で、北陸系の土器が出土していることに重視する必要があると考える故をもって、前記した「柳町式」土器の内容・編年の位置を再検討する必要があると思う。安源寺遺跡出土の土器の中にも、この種の土器が含まれていると聞いているし、もっと見直せばこの北回りの土器が以外と多いのではないだろうか。またこの種の土器が箱清水式土器に与えた影響はいかかなものであったろうかという問題も今後の問題として残る。

ともかく一日もはやく、箱清水式土器の本体を知りたいものである。それはとりもなおさず箱清水文化の尺度を決め、文化・政治的な問題を解き明かす鍵を握っているからである。そして遺構からの追求も土器理解のため大きな役割を果たすものと考えられる。遺跡の立地的あり方・規模・そして文化内容はもとよりのこと、住居址の規格・柱穴の配列・炉の位置と形態などの比較検討からも有効な示唆がでてくると思うし、むしろこれらを考慮に入れながらの考えが必要となるであろうことはいうまでもない。^(註11) (矢口)

註における論文・報文は本書の「箱清水式土器関係文献」を参照にされたい。

註1 蒔田1901・玉置1904・藤森1936

註2 桐原 健1956No.30 この論文の基礎的出発点は藤森1936論文の承襲による。

註3 長野高等女学校は昭和14年に火災で焼け落ち、所蔵した資料はほとんどが滅失したと思われる。その整地状態は、長野市教委1981で記した通りである。一部発見当初の資料は、当時の校長であった渡辺敏氏により東大人類学教室に送られ、現在も完形品を含む箱清水式土器と土師器が保管されている。しかし昭和14年刊の『長野市史』中の本遺跡紹介の写真をみる時、土師器が目立つ。

遺跡に対する評価でも、藤森論文では、数百点におよぶ完形の土器が出土した遺跡となっているが、発見当初現地に赴いた蒔田氏、その後の玉置氏の報文にそのことについての記事がみえないばかりか、遺構についてもわずかな記述がある程度である。このことを考えれば、箱清水遺跡の集落址の評価を考えねばならない。校庭造成時に滅失したという評価も含めて。

註4 藤森1936・『信濃史料』1巻上1956他

- 註5 桐原1971・桐原『安源寺遺跡』所収1967・笹沢『生仁』所収1970・笹沢1977・群馬・長野・埼玉
弥生土器研究グループ1980・1981
- 註6 中野市教委1967・更埴市教委1969・笹沢1970
- 註7 白田1980・長野市教委1980・太田1980
この他長野市内では、篠ノ井遺跡群聖川境防遺跡の方形周溝墓より良好な資料がある。
- 註8 藤森1936・桐原1956・桐原1959
- 註9 笹沢1970No.56・長野市教委108
- 註10 森嶋1978
- 註11 該期について総論的にとり上げているのに森嶋1978がある。

第3節 箱清水遺跡の意義

日本考古学において、弥生文化の研究は東京本郷弥生町の向ヶ丘貝塚で口頸の欠けた壺が発見された明治17年に遡る。それが報告されたのは明治22年4月の東洋学芸雑誌91号で、この時は単なる石器時代の土器として取りあつかわれている。その後、26、27年に同種土器の発見があって、縄文土器とは異なるらしいとされ、29年に蒔田鎗次郎氏が「弥生式に就て」を人類学会雑誌122号に発表している。その後の進展だが、29年には蒔田論文をふくめて2編、30年に2編、31年に1編、33年に2編といった状態で、資料の蓄積は甚だしく低調だった。そこへ34年に至り9番目の「箱清水遺跡報告」がだされ、ここに至って弥生式土器はようやく自らの位置を得た。森本六爾氏は「弥生式土器研究史」の中で、「明治30年代に入りますと、当時の仮称『弥生式土器』は西南方は南九州から、東北地方は陸奥にまで及んでいることが知られ、その発見国数も約30カ国に達する有様となって参りました。殊に長野市箱清水にある高等女学校の敷地から、一遺跡にして数百コの土器を出したという事実は一層この弥生式土器に議論の花を咲かせる結果となりました。」といかに箱清水遺跡の発見が弥生文化研究上重要なエポックであったかを述べている。

この最初の報文というのが明治34年10月20日の東京人類学会雑誌187号、35年1月20日同誌190号に掲載された蒔田鎗次郎氏の「長野市に於ける弥生式土器の発見」、及び37年2月20日同誌215号掲載の玉置繁雄氏による「長野市で見た弥生式土器」で、これによると、長野高等女学校々長波辺敏氏が東京帝大の坪井正五郎博士に調査依頼を行い、博士は34年9月はじめに來長して遺跡視察後に講演を行っている。博士はこの遺跡が弥生遺跡だということで、当時同土器を追求していた蒔田氏に再調査を命じ、蒔田氏は9月19日に箱清水遺跡に臨んでいる。

「長野市に於ける弥生式土器の発見」—蒔田鎗次郎—

(『東京人類学会雑誌』187・190号掲載)

長野縣長野市に今回多数の石器時代の土器が発見されたとのことで坪井先生が佐渡旅行の掃途御立寄になったのであるが、其は彌生式土器の類品であったので、予に取調よとの仰であったから、去月18日東京を去って長野へ向ふた。予は直に土地の熱心家なる高等女学校長波邊敏氏を訪問して、氏の採集に係る總ての土器を一覽し、翌日は氏の案内で其発見地と云ふ字箱清水の高等女学校敷地へ行ったのである。此地は善光寺門前を左へ戸隠道をなだら上りに漸々2・3町登った所で、旭山、郷路、往生寺、大峯の諸山其西北を蔽ひ、東南は廣茫たる平野で、即ち長野市の存在する所である。由來箱清水なる地勢は、前世期に於て非常なる大洪水でもあって形成せられたるかの如き水成岩質の丘陵であるから、彌生式の遺跡とも云ふ可き竪穴は東京に於ての如く區劃判然せず殆んど石器時代の包含層の如くである。現在露



第13圖（第1圖）蒔田・玉置論文掲出土器

はれているのは少かに1ヶ所で、其も坪井先生の仰で残されたので此れは餘程大きく長さ5間程に深か2尺ばかり矢張り圓形で最早中心と思はるゝ所は掘り取られたと見へて、予が発掘の時は少量の灰及び土器の小破片丈であった。其他猶ほ穴と思ふ所も有つたが時日に制限があるので一先づ中止したが、從來発見された遺物に就て取調べ得た結果を述べ様と思ふ。

土器の多くは破片であるから全形を認むべき物は實に少数である。然しこれを大凡に分類せば左の如くなる。

- （疊付きのもの）皿形、コップ形、瓶形あり。
- （碗形のもの）平底、糸底あり。
- （漏斗形のもの）有孔と無孔あり。
- （深皿形のもの）平底、糸底、有孔、無孔とあり。
- （瓶形のもの）

其他手掛ある茶碗形土器、石器及び焼ヶ壺、焼ヶ木等もあつた。

（第1圖）(1)は豎5寸横巾廣き所で2寸8分左右の側（内側點線ある所）に切込あり且つ中央には圖の如く1個の突き孔がある内外共に總朱塗りて之は大なる高杯の臺の破片であつて切込は即ち祝部に能くある透しの類と思はれる中央の孔は未だ例がない實用とも考へられねば矢

張り装飾の一つである。外縁は其臺の形状を示すのである(2)、(4)、(5)、(6)、及び(3)は臺の種類なり(3)、(6)を除く外は總て朱塗りである(5)は杯の着け際に圖の如く三段の高まりあり此れは未だ類品を見ない。

(7)は高さ凡1尺5寸杯の直径1尺2寸其質堅く全体朱塗りで美觀なる光澤を有す此れは今回発見中の優品であるか若し1圖の全体が完備してあったならば恐く其右に出るであらふ。

(10)は高さ凡4寸上部は欠損すれど其形状は先づ點線を以て示すが如くならんか胴部には不規則なる波紋がある其色は帯褐黒で最も粗造なれば若し1個で発見したならば或は石器時代の土器の如く考へられる。

(12)は高さ凡5寸口径4寸なり頸部の周圍には横に長短の5線があつて其上下には(10)と同じく不規則な波紋が畫かれてある東京近傍には多く此の類品を出す(但し飾りある物は少し)。

(24)は高さ2寸口径4寸5分深き皿形をなす内部は總て黒塗りなり。

(8)は高さ4寸2分口径2寸8分全体に波紋及び頸部に横線ある事(12)と同じ。

(28)は縁厚く肩部を著しく突き出て底部へ急に斜面をなす全体朱塗りにて底は上げ底なり。

(25)は薄手にて最も巧なる製作なり而して底は糸底である。

(9)は口径1尺2寸總朱塗で口邊に近く圖の如く相對して2個の突き孔がある其質堅く全体は頗る大なる物であらふ。

(13)は胴部より上を尖へり故に全体を知る事は出来ないが現存部はすり鉢の如く上の欠け口に著しき角度あり廣き所で直径凡2尺總朱塗りなり(9)の口部は或は之に附屬するかも知れないが中央部がないから不明である。

(23)は高さ2寸5分、口径凡5寸(22)の類品なれど縁部薄く肩より底へ漸々丸みを持つ底部には徑6分程の大孔がある。

(11)は上部全く欠損す現形の高さ6寸8分頸部に横線あり又波紋ある事(11)、(12)の類なり。

(15)は漏斗形のもの之に有孔及び無孔とあり口径凡5～6寸。

(21)は口径凡3寸高さ1寸4分側面に6分程の手掛と思はる突起あり内外共に總朱塗りなり猪口の類にてもあるか。

(19)は茶碗形のもの口径4寸高さ2寸外部は朱塗りなり。

(17)は最も薄手の製作にて全体に細かき刷目あり口径4寸高さ2寸3分程。

(14)は高さ1寸6分下部直径3寸3分外部は朱塗りなり其形笠の如く内部は矢を以て示すが如く上下へ貫通してをる予は何れかに屬する蓋の類と思ふなり。

(18)は(14)の類品なり左れど内部は貫通せず朱塗りにて高さ2寸4分程なり。

(16)、(20)は餘りの小破片で蓋の類なるや將た底部なるや判然しない只(16)は一つ(20)は五つの中央に小孔がある。

今回発見中の主なる土器は先づこんな物である其他彌生式の特徴ある大瓶形の大破片も有つたが後は小破片で別段記する程の品もない今此等の土器を東京邊のと比較して見よふならば

非常に精巧の者あり又劣等の者がある素より地方によりて其製作を異にするのは當り前の事で石器時代に於ても龜ヶ岡式と云ふ様な者である殊に今回の調査は面白く未だ発見されない者が澤山ある。(1)、(2)、(5)、(7)、(10)、(22)、(25)、(23)、(13)、(21)、(14)、(18)、(16)、(20)、及其他石器の類である。就中(7)の如きは東京邊の彌生式の類とは全く思われぬが去りとて又古墳からこんな朱塗の土器の出た例も聞かない又(14)、(18)が、予の云ふ如く或る器物の蓋であったならば人類学教室にあるジャウアボルネオ邊の焼き物に能く一致するのである。

模様類は餘り見受けぬ先づ(10)、(12)、(8)、(11)位の者だ又今回は有孔の者が割合に多く出た(1)、(9)、(23)、(12)、(14)、(16)、(20)の類で(1)は裝飾(9)は實用(23)は現今の漏斗の如き用に供したるものか(14)、(16)、(20)は息き出しの爲めとでも云ふ可きか左れど(23)の孔に至ては更に其用を知るを得ない。

總て今度の発見は小形の物が多い様であるが小形程欠けぬので大形の物も数多発見されて居る何れも破片で底部に依て漸く知る事を得るので其最大なる物は直径4寸2分もある又最小なるは直径1寸餘りなり。

次に彌生式の穴から數個の石器が発見されたのは今回が初めて、ある其形状の異なりたる物4個に就て左に述べよ(25)は断面が三角形の石器で其角の3面が磨かれ(27)は下部が凹状に(28)は左側面が何れも磨かれてある(26)は其形磨製石斧の如くなれど刃部丸く磨かれ決して刃として用ひられたるものではない以上の石器は或は石器時代の品と稱するも其判別出来ないが(26)圖の如きは確に一つの特徴がある予は此等の石器は土器製造の爲に造られたのであらふと考へる。

以上の発見品に依て此の遺跡とも云ふ可き竪穴に附て大に研究する所があった予は此の穴の或る者が焼け麥、炭、灰、及石器などの発見から見ると確に其の1部は土器製造場處として用ひられた事が推察出来る。

終に一言すべきは此の彌生式土器が古墳時代の前或は後に属すべき者が將た又並び行はれたるかは最も研究を要すべき問題であらふと思ふのである。

編者曰く此遺跡の事に関しては曾て長野中学の野津左馬之助氏より坪井理科大学教授へ借書昨年9月4日附けを寄せられし事有り。一説として之を左に附記す。(前略)却説一昨夕は御來長且つ御講話をなされ候趣傳承致居候へども折悪く他出中拝顔の榮を得ず遺憾此事に御座候承れば其節高等女學校敷地發掘の彌生式土器につき御講話なされたる趣に候處右發掘土器の多分は渡邊該校長の手許に有之御一覽の事と存候小生も生徒より贈與くれし破片又自分採得せるものをも所持致居候彌生式土器に付ては兼ねて愚考も有之候事故生徒兩3名引き連れ再應探訪候結果左の數品を拾得候。

1、土器

甲、朱を塗りしもの。

乙、朱杯塗らざる浮紋土器にて普通諸方にて発見する物、此式に屬するものは該地のみ

ならず此所を去る2~3丁の畠地よりも度々発見す。

2、石器

甲、打製 1個。

之又北佐久郡邊にあるものと同質同式のもの。

乙、磨製 1個。

之又同断半は折れたるものにて齒の邊使用せる結果として著しく磨滅せり。

3、石鏃及び其材料 數々 普通のもの。

4、緑玉 1個。

5、渦紋土器破片 數個。

右は凡て現在の儘なるを拾ひしには無之人夫の掘出せる跡又は運土の堆積中より得しものに候第三紀層の上に凡そ一尺計りの黑色糞土ある其中より重に得たるものにて候。

元來彌生式土器なるものは未だ學者間に一定の見解も無之様に候へ共小生の早見にては(重に信州地方に於ける現状より推測して)矢張りコロボックル人の製作物なれども彼等民族の末期に際し大和民族の膨張の爲め相接觸し其結果として兩民族の製作法及び其式を混合せるものとの考にて御座候。(下略)

この報文によると、幾つかの竪穴住居址があつて、その中には火災による廃滅で炭化した麦の出土のあつたことがわかる。又、蒔田氏の調査に先んじて行なわれた長野中学校の對津左馬之助氏の調査によると少なくとも基盤層までは30cmの堆積のあつたことが知られた。

次に玉置氏の報告は整地工事が終り、北校舎、中校舎、寄宿舎、雨天体操場の落成を見た37年に鳥居龍藏氏と共に見学された時のレポートで、まだ竪穴住居の断面がのこっていた。

「長野市でみた彌生式土器」—玉置繁雄—

(『東京人類学会雑誌』215号)

題號に掲げた通り、私はこれから昨年鳥居氏と共に北信濃地方へ旅行した時に、其長野市の高等女學校で見て来た彌生式土器に就て、聊か所見を述べやうと思ひます、最も此事に關しては已に蒔田次郎氏が本誌第17巻189號及び全しく190號に「長野市に於ける彌生式土器の発見」と題して報告をせられてありますから、それを是非共参照して頂き度い。

附言、本文起稿の時に際して鳥居氏が材料及注意を與へられました爲に愚論の立脚地を得た事が中々少量でありませぬから豫め茲に記して其厚意を謝します。

さて此高等女學校のある地は小字を箱清水と云つて、市の北端、山の麓で見晴もよく、彼の有名な善光寺へも右手の方僅12丁の處である。此學校の建設せられたのは23年前の事であるが其當時地均をした時に其所此所に所謂塵捨穴も発見されるし、塵捨穴から彌生式の土器も

発見されたのである、吾々は其當時發掘されたもの並に其以後少し宛集つたものを見て来た譯である、塵捨穴の如何なるものであるかは今も1個横断面の残って居るのがあるからよく分る、深さ2尺5寸位、長さは3間位、土器の埋まって居る有様も1ヶ所に集って居らずにチラホラ點々散在して居る處が十分分る、其所を寫眞に撮つたのであるが雪や何かの爲に明瞭に出来なかつた、尚ほ同校長の渡邊敏氏が厚意によって人夫を發して吾々の爲に塵捨穴のありそうな所を2時間餘りも縦横に發掘して呉れたのであるけれども土器片1個も得ずして終りました、此現象は或側かやいへば徒勞に播したやうであるが然し是によって此地の彌生式の土器は塵捨穴以外に發掘し得られぬといふ事が證明されるのである、然のみならず今迄此所の例に依つても塵捨穴以外よりは出ないといふ事であるから尚更に證明は付くし、已に發掘せられた土器の中十中の五六迄殊更に打ちくたして放棄したらしい形式があつて廢物を棄てたらしい形式は比較的少くないし、今露はれて居る断面の工合或は土器と同時に木炭或は穀殼の炭などの發掘されているのを以て考へても堅穴に居住して居つたもの、残したものととは思へないし、蒔田氏の言の如く製造場とも思へない、其故は製造場として常に伴ふべき物件即甕跡、數枚添着して居る重り焼等一も見えないで只土器の表面コスル爲に用みしと思へば思はれる石2~3出づるのみ、此石とても何とやら此土器とは同時代否此土器を製造する時に用みられたものでないとは實物を一見さへすれば容易に見分けられるし實用でないといふ事は已に蒔田氏の掲げられたる圖に依つても知らるゝ、上珠に朱を多く塗つて然も薄手のものが幾つもあるのて知られる。

斯うして考へて見ると製造所説も實用説も此所の例には當てはまらない。

此所に一の面白い事實として現はれたのは他でもない祝部土器の彌生式土器と同時に同所から發掘せられた事である、尤も祝部土器の彌生式土器と同時に發掘せられる事は珍らしい事ではないか其形式及び模様相似たる點である。

(33は祝部31・32・30・34・35・36は彌生式)……………(中略)……………

ですから今は此所から出た彌生式土器に対しては其祝部土器と同一の使用なる事と云はんとするのである、即祭器説である、固より祝部土器とても古く遇れば實用であつた時代もあらふが今は已に祭器と認められて居る以上は祭器と云つて差支へあるまい、さすれば朱塗の彩色もよからう、薄手なもの解釈が付く、殊に朱塗のは今も三方に朱塗のものもあるを以て見れば思ひ半ばにも過ぎる事である、又其高杯形にスカシのあるのも三方の孔が證明せよう、彼の木炭のあるのも大野氏の説の如くに伊勢神宮の例によって時々焼き棄てたものとすれば差支へがなく、其の土器の量の多いのも其神宮の例より推せば一向差支へる事はない。さうすると此地に何か大きな神社がなければならぬ即日本地理志料卷ノ7、水内郡芋井の條を按ずるに、

(……)意水内神社在此、……(中略)……神名式水内郡建御名方富命彦神別神社、一名水内神、今在箱清水村善光寺域内、稱年神堂、按善光寺緣起、推古帝時、州人若麻績東人、獲佛像於難波堀江、後建堂於水内郡芋井郷安焉、所謂善光寺是也、栗田寛曰、初東入設寺

于社地、及佛寺益盛、神祠竟衰、僧徒奪其社地、大興堂塔、而本社僅存一小祠、稱年神堂、世不復知其爲官社、唯如來堂今猶行風祭、注連張、年越等神事者、即本社祭儀之遺也……とあるので愈益かめる、右水内神社は今は明治11年善光寺の境内から其東方假寝園、元本城山といって往時城塞のあった地へ移されてある。

右に述べたか、りであるから他はいざしらず此高等女学校敷地から發掘された彌生式土器は祭器であると私は云ふのである、が然し此所から出るもの、中に糸底のもの多く出るのを以て見ると彌生式といふ中でも時代は殊に新しいものであらうととにかく時代は祝部土器の行はれて居った末期此方のものであらうと考へる。

以上述べた處は余が一つ信濃で見て来た例に1~2他の知って居る例を加へて此の地に於ける彌生式土器の如何なるものかを論じただけで他の多くの例にまで推し及ばず事の出来ないのは無論の事であるから一言加へて置きます。

その後、遺物のうち完形を保つものは東京大学人類学教室に贈られたが、それでも多くの遺物は学校に保管されていた。大正14年刊行の『長野市史』には次の様な記述がある。即ち遺物20数点を4段の棚に並べて写真撮影し、その説明として「上より1・2段は古アイノ人使用の土器にて多くは液体を容るる器の破片なり。第2段の中央にあるものは、楕形を存するものにて、土瓶の如きものなり。他は器物の把手なり。皆、高等女学校敷地地ならしの際に出でしものなり。第3・4段は弥生式土器にて、多くは液体容器及其の台、漏斗等なり。皆高等女学校敷地より出でたり。同地は弥生式土器を出したることは数において殆本邦第一にて形状の完全なるものは多く東京大学人類学教室に贈れり。

これによると箱清水遺跡からは弥生土器のみならず、縄文中期土器も出土していたことがわかる。又、蒔田・玉置論文からも弥生土器のみではなく土師器も結構多く出土していた。又、『長野市史』の挿図によっても古墳時代の土師器や、高台を有する歴史時代の土器の混在がうかがわれる。

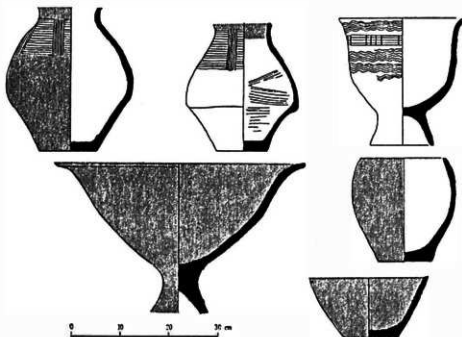
昭和に入って長野高等女学校は14年の火災で収蔵遺物を焼失してしまうが、その前に藤森栄一氏が遺物を実測している。弥生式土器聚成図録作成の時、氏は弥生土器を信濃の弥生後期の標式土器に指定し、「箱清水式」に提唱された。

「信濃の弥生式土器と弥生式石器」—藤森栄一—

(『考古学』7-7)

長野箱清水

長野市箱清水が明治の末期長野高女の校庭工事によって発掘された際、出土した弥生式土器は完全に近いもののみで数百個に近かったと当時の記録にある程ですから、余程の大遺跡だったに違いありません。それ等は刷毛目をもつ鬘とそれに等しい鉢、有孔底の土器、罎を



第14図 藤森論文掲出土器

もった土器同じ意味の角を持った土器等と又塗丹された円底の壺、碗、高杯、器台等のA・Bの二形態に分けることができました。

前者は粘土は良いのですが、焼成は極めて弱く、薄手でガサガサの粗雑さで、後者は美しく磨かれる場合が多いのです。櫛目文に類した施文も大分ありますが岩村田期のものより大部精彩を失って殆んど整形副作用にすぎません。箱清水では凹石が数個出土しています。信濃全体に及んでこの期の遺跡は最も瀾漫したものの様であります。千曲川上流では岩村田町付近、中込町付近、犀川では松本市南方の低地、出川・清水方面、諏訪湖の橋原、横内、天龍川上流の長岡など共にすばらしく広汎な聚落遺跡の大きなものです。いずれにしても石器は大きな石錘や凹石などの絶対的鈍器の外は注意されておりません。遺跡の断面からは往々堅穴が見出されるのですが、それらは余り大きなものではありませんがその数はすばらしく多く密集しているのが常であります。

この場合の箱清水式中には古墳時代に属する土師器が混入している様である。しかし、弥生後期に位置づけした氏の業績は大きい。

以後、更に20年を経過し、31年には『信濃史料1巻』が編まれたが、ここでは藤森説を継続し、弥生後期の一型式として箱清水式を設定している。

斯様に、箱清水遺跡は伝説のみならず日本の弥生文化研究史上輝くべき位置を占めている。

戦後、学校前庭の整備が行なわれた際に縄文中期と弥生後期の土器片が出土した。この結果、学校敷地の南半分にはまだ遺跡が残っているとの期待がもてた。

昭和53年に同窓会館の改築が決ったので、同校地歴班が発掘調査を行なった。だが地形的に遺跡の束限を越えていて遺構・遺物の発見はなかった。

続いて校舎の全面改築工事が始まり、それに先立って55年に南校舎と中校舎間の中庭にグリッドを設定。その結果、昭和14年火災の廃土埋立層、明治34年校舎建築時埋土層の下に遺物包含層を見出した。南校舎、及び前庭の地表下2.4mに箱清水遺跡の眠っていることが確認できたからである。又、北方は中校舎下まで及んでいることも推察でき、今後、同校舎改築時には調査すべき必要のあることもわかった。

そして、昭和58年の調査で、ついに竪穴住居址1軒を露呈することができた。82年ぶりに学史の中から箱清水遺跡が甦ってきたのである。

遺物量は今回も少なかったが、住居址という遺構に係っての出土なので大きな価値がある。弥生から古墳時代にかけてのヒヤタスをうづめてくれるに相違ない。また、この資料が現代東大人類学教室に眠っている明治34年出土資料に生命を与えてくれる筈である。

(桐原)

箱清水式土器関係文献目録

(正式報告書が発刊されている遺跡の概報は省略した)

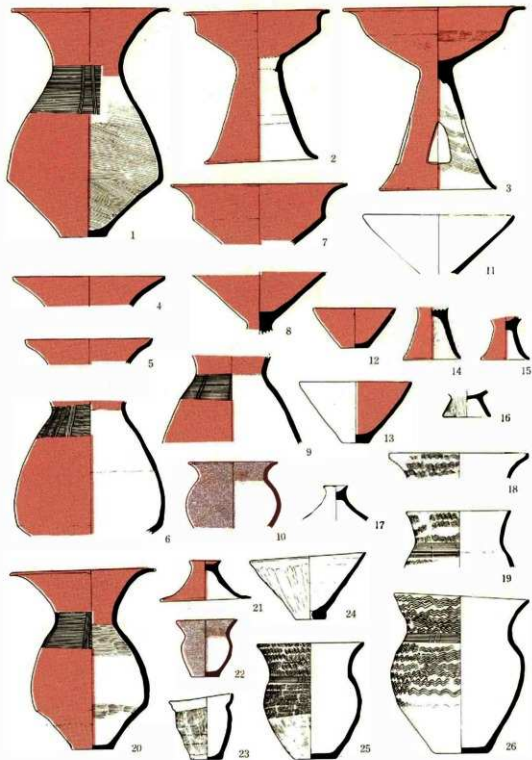
- 1 蒔田鎗次郎 1901「長野市における弥生式土器の発見」(『東京人類学会雑誌』180)明34
- 2 蒔田鎗次郎 1901「長野市における弥生式土器の発見(続)」(『東京人類学会雑誌』187)明34
- 3 玉置 繁雄 1904「長野市で見た弥生式土器」(『東京人類学会雑誌』215)明37
- 4 小山 真夫 1920「小県郡の赭色土器」(『信濃教育』403)大9
- 5 長野市役所 1925『長野市史』大14
- 6 小林 行雄 1932「柵目式文様の分布—弥生式土器における柵目式文様の研究」(『考古学』3-1)昭7
- 7 森本 六爾 1933「弥生式土器研究史」(『ドルメン』2-2)昭8
- 8 清水 保 1934「朝陽村十二の出土物に就いて」(『信濃』I・3-11)昭9
- 9 八幡 一郎 1934「北佐久郡の考古学的調査」
- 10 神田 五六 1936「北信楽林の弥生式土器」(『考古学』7-7)昭11
- 11 清水 保 1936「柳原村小島出土物(其二)」(『信濃』I・5-3)
- 12 神津 猛 1936「岩村田の弥生式遺跡」(『信濃』I・5-8)
- 13 藤森 栄一 1936「信濃の弥生式土器と弥生式石器」(『考古学』7-7)
- 14 神田 五六 1937「善光寺平の弥生式文化について」(『長野県国民文化講習所所報』3)昭12
- 15 藤森 栄一 1937「千曲川下流長峰・高丘の弥生式石器」(『考古学』8-8)
- 16 森本六爾・小林行雄編 1939「弥生式土器聚成図録」昭14
- 17 五十嵐幹雄 1950「長野県弥生式文化流入の経路試論」(『信濃』III・2-7)
- 18 五十嵐幹雄 1950「信州大学繊維学部保存の弥生式土器」(『信濃』III・2-7)
- 19 神田 五六 1950「東日本における弥生式文化の研究」(『信濃』III・2-7)
- 20 清水 亨 1950「下水内郡外様村東長峰5・6号住居跡発掘調査報告書」(『下水内郡遺跡発掘調査報告書』1)
- 21 森山 茂夫 1950「外様村尾崎東長峰発掘調査報告(1)」(『下水内郡遺跡発掘調査報告書』1)
- 22 森山 茂夫 1950「長峰遺跡群尾崎遺跡7号住居跡発掘報告」(『下水内郡遺跡発掘調査報告書』I)昭25
- 23 寺島 昭夫 1950「下水内郡外様村東長峰3・4号発掘調査報告」(『下水内郡遺跡発掘調査報告書』I)昭25
- 24 高丘小・中学校 1951「安源寺遺跡発掘略報告」昭26
- 25 東 道雄・清水 亨・森山茂夫 1951「下水内郡外様村東長峰3・4・5・6・7号住居址」(『下水内郡遺跡発掘調査報告書』II)

- 26 森山 茂夫 1951「外椽村尾崎長峰遺跡7号住居址」(『水内会会報』3)
- 27 小野 勝平 1953「下高井の考古学的調査」(『下高井』)昭28
- 28 桐原 健 1953「信濃国間山発見の合口甕棺」(『上代文化』24)昭28
- 29 藤森 栄一 1955「各地域の弥生式土器—中部高地・北陸」(『日本考古学講座』4)昭30
- 30 桐原 健 1956「弥生文化」(『信濃史料』1巻下)昭31
- 31 桐原 健 1956「箱清水式土器における赤色塗彩の傾向とその意義」(『信濃』Ⅲ・8-12)
- 32 桐原 健 1956「信濃の後期弥生式土器」(『上代文化』26)
- 33 桐原 健 1957「北信濃長峰丘陵柳町遺跡調査概報」(『信濃』Ⅲ・9-12)昭32
- 34 高野 行栄 1957「四ツ谷遺跡について」(『道科教育』5)
- 35 佐原 真 1959「弥生式土器製作技術に関する二・三の考察—掃描文と回転文をめぐる—」(『私たちの考古学』20)昭34
- 36 桐原 健 1959「北信濃長峰丘陵における弥生式遺跡」(『考古学雑誌』45-1)昭34
- 37 五十嵐幹雄 1959「和村誌」(和村誌編纂委員会)
- 38 田川幸生・桐原 健 1962「長野県安源寺遺跡の弥生式土器」(『信濃』Ⅲ・14-4)昭37
- 39 桐原 健 1964「稲玉を籠める土器—無頭壺形土器の消長」(『上代文化』34)昭39
- 40 小林 行雄・杉原 莊介編 1964「弥生式土器集成(本編)」
- 41 神村 透 1966「弥生文化の発展と地域性—中部高地」(『日本の考古学』Ⅲ)昭41
- 42 高橋 桂 1966「北信濃須多々峯弥生式墓塚調査略報」(『考古学雑誌』51-3)
- 43 金井 汲次 1966「長野県中野市安源寺遺跡調査」(『日本考古学協会昭和41年度大会発表要旨』)
- 44 中沢 要・島海 弘男 1967「更級郡上山田町力石西沖で検出した弥生後期の一道橋」(『信濃考古』19)昭42
- 45 金井汲次他 1967「安源寺—中野市安源寺遺跡緊急発掘調査報告」(中野市教委)
- 46 永峯光一・樋口昇一 1967「長野県唐沢岩陰」(『日本の洞穴遺跡』)
- 47 神村 透 1968「長野県の弥生文化研究への課題」(『長野県考古学会誌』5)昭43
- 48 桐原 健 1968「手で持ち運ばれてきた土器」(『古代学研究』51)
- 49 丸山敏一郎 1968「長野県菅平陣の岩岩陰遺跡調査概報」(『信濃』Ⅲ・20-5)
- 50 長野県考古学会 1968「シンポジウム弥生文化の東漸とその発展」(『長野県考古学会誌』5)
- 51 岩崎卓也他 1969「生仁—更埴市生仁遺跡第一次(昭和43年度)緊急発掘調査報告」(更埴市教委)昭44
- 52 竹内 恒 1969「人骨の特殊な出土状態を示す長野県佐久市城畑遺跡」(『信濃』Ⅲ・21-4)
- 53 高橋 桂 1969「北信濃城端遺跡調査略報」(『信濃』Ⅲ・21-7)
- 54 神村 透 1969「弥生文化各観—中部山岳地帯」(『新版考古学講座』4)
- 55 笹沢 浩 1970「箱清水式土器の再検討」(『信濃』Ⅲ・22-4)昭45

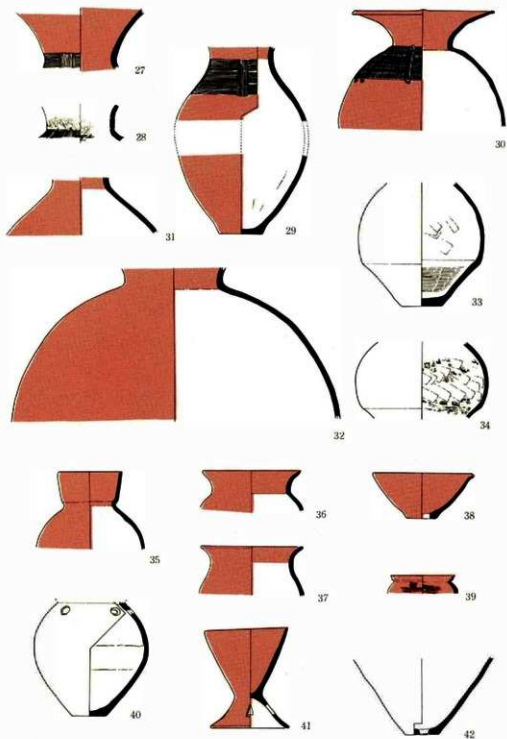
- 56 笹沢 浩 1970「箱清水式土器発生に関する一試論」(『信濃』田22-11)
- 57 川上 元 1970「上田市上平遺跡緊急発掘調査報告」(『長野県考古学会誌』8)昭45
- 58 川上 元・小林幹男 1970「長野県小県郡塩田町柿木遺跡」(『信濃』III・22-8)
- 59 小林 幹男 1970「長野県東部町長縄手遺跡」(『日本考古学年報』18)
- 60 桐原 健 1971「北信濃の後期弥生式土器」(『一志茂樹博士喜寿記念論文集』)
- 61 千曲川水系古代文化研究所 1971「長野県更級郡上山田町御屋敷遺跡発掘調査概報」昭46
- 62 長野市教委 1971「平栄平遺跡緊急発掘概報」
- 63 小林幹男・川上 元 1971「上田市西光坊・向田II・石原遺跡の調査」(『上小考古』1)
- 64 更埴市教委 1971「下条・灰塚」
- 65 佐久市教委 1971「佐久市新子田戸坂遺跡緊急発掘調査概報」
- 66 佐久市教委 1971「佐久市長土呂西近津遺跡緊急発掘調査概報」
- 67 佐久市教委 1972「岩村田一本柳—佐久市岩村田一本柳遺跡緊急発掘調査概報」昭47
- 68 竹内 恒・土屋長久 1972「佐久市岩村田東一本柳古墳緊急発掘調査報告」(『長野県考古学会誌』13)
- 69 小林幹男・川上 元 1973「長野県上田市西光坊遺跡・向田I遺跡・石原遺跡緊急発掘調査報告」(『長野県考古学会誌』15)昭48
- 70 佐久市教委 1973「岩村田餅田—佐久市岩村田餅田遺跡緊急発掘調査概報」
- 71 竹内 恒・草間富士夫 1973「佐久市新子田戸坂遺跡緊急発掘調査報告書」(『長野県考古学会誌』16)
- 72 白田 武正 1974「佐久市岩村田西一里塚遺跡発掘調査概報」(佐久市教委)昭49
- 73 丸山敏一郎 1974「善光寺平南縁の自然堤防上の遺跡について」(『信濃』III・26-1)
- 74 日本民俗資料館 1974「信濃の弥生文化展」
- 75 森森 栄一 1975「箱清水と思い出の人々」(『長野』5)昭50
- 76 桐原 健 1975「赤色塗彩土器の出現」(『信濃』III・27-7)
- 77 笹沢 浩 1975「長野市清野四ツ屋遺跡出土の後期弥生式土器」(『信濃考古』30)
- 78 上田市教委 1975「天神遺跡・山田屋敷緊急発掘調査報告書」
- 79 佐久市教委 1975「三塚鶴田—緊急発掘調査報告書」
- 80 東部町教委 1975「城ノ前遺跡緊急発掘調査報告書」
- 81 三渡俊一郎 1975「S字口縁台付甕形土器出土の遺跡分布に関する私見」(『古代学研究』76)
- 82 森嶋 稔 1975「極小の貯蔵形態の土器」(『長野県考古学会誌』21)
- 83 笹沢 浩 1976「弥生時代」(『上水内郡誌』歴史編)
- 84 飯山市教委 1976「岡峰遺跡緊急発掘調査報告書」昭51
- 85 日本窯業史研究所 1976「屋地遺跡」
- 86 興水利雄・森嶋 稔 1976「佐久市長土呂出土の弥生式土器」(『長野県考古学会誌』26)

- 87 飯山市教委 1977「岡峰遺跡第2次発掘調査報告書」昭52
- 88 上田千曲高校 1977「上田千曲高校敷地内遺跡発掘調査報告書」22「日考昭52大会要旨」22
- 89 桐原 健 1977「小布施町中子塚出土土器の様相」(「高井」41)
- 90 高橋 桂・太田文雄 1977「北信須多ヶ峯遺跡第2次発掘調査報告」(「信濃」III・29-4)
- 91 佐久市教委 1977「細田遺跡緊急調査概報」
- 92 佐久市教委 1977「佐久市後沢遺跡調査概報」
- 93 笹沢 浩 1977「弥生土器—中部・中部高地3」(「考古学ジャーナル」134)
- 94 飯山照丘高校 1978「飯山照丘高等学校敷地内遺跡発掘調査報告書」昭53
- 95 森嶋 稔 1978「弥生時代」(「更級地科地方誌」第二巻)
- 96 桐原 健 1978「箱清水遺跡のもつ意義とその顕彰」(「長野」82)
- 97 西沢寿晃・小松 虎 1978「長野県佐久市月明沢遺跡発掘資料について」(「長野県考古学会誌」31)
- 98 中野市教委 1979「安源寺II—安源寺遺跡第三次発掘調査報告書」54
- 99 長野市教委 1979「塩崎遺跡群—塩崎小学校地点遺跡の第2次調査報告」
- 100 佐久町教委 1979「宮の本—長野県佐久町宮の本遺跡発掘調査報告書」
- 101 東部町教委 1979「海善寺—長野県東部町海善寺遺跡群発掘調査報告書」
- 102 渡辺重義・森嶋稔・森山公—1979「北佐久郡軽井沢町泉遺跡の調査」(「長野県考古学会誌」34)
- 103 上田市立博物館 1979「郷土の歴史—上田の原始・古代」
- 104 桐原 健 1980「信越両国間交流についての考古学的所見」(「信濃」III・32-12)昭55
- 105 豊田村教委 1980「南大原遺跡—上今井橋架け替工事に伴う発掘調査報告書」
- 106 長野市教委 1980「三輪遺跡—三輪小学校地点遺跡、第1～3次調査報告、付水内坐一元神社(柳原小学校)遺跡調査報告」
- 107 長野市教委 1980「篠ノ井遺跡群—大規模自転車道地点遺跡の調査報告」
- 108 長野市教委 1980「四ツ屋遺跡・徳間遺跡・塩崎遺跡群」
- 109 千曲川水系古代文化研究所 1980「編年」
- 110 白田 武正 1980「佐久地方の後期弥生式土器について」(「信濃」32-4)
- 111 太田 文雄 1980「北信濃の弥生後期編年について」(「信濃」32-4)
- 112 飯山市教委 1980「鍛冶田」
- 113 群馬・長野・埼玉弥生石器研究グループ 1980「シンポジウム弥生土器—簡描文の系譜」
- 114 桐原 健 1981「弥生後期編年にかかわる一疑問」(「信濃考古」63)昭56
- 115 長野市教委 1981「箱清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡」
- 116 中野市誌刊行会 1981「農耕文化のおこり」(「中野市誌」)
- 117 坂城町誌刊行会 1981「弥生時代の坂城」(「坂城町誌」)
- 118 林 和男 1981「S字状口縁をもつ土器1例」(「長野県考古学会誌」41)

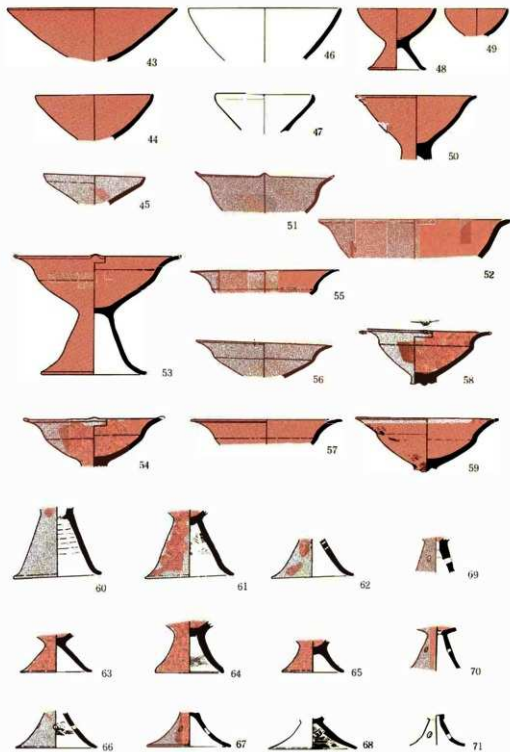
(宮下)



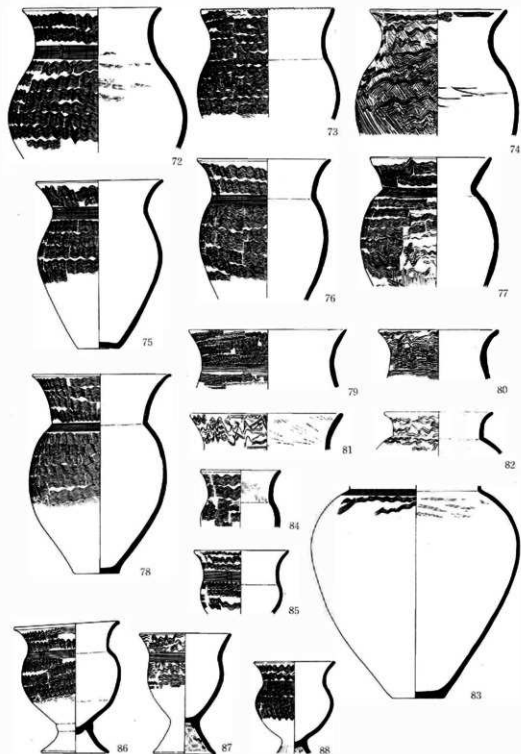
長野市出土箱清水式土器集成1 (1:6)



長野市出土箱清水式土器集成 2 (1 : 6)



長野市出土箱清水式土器集成 3 (1:6)



長野市出土箱清水式土器集成4 (1:6)

長野市出土箱清水式土器集成解説 出土遺跡及び文献

神楽橋遺跡 1～3 文献93

篠ノ井遺跡群・大規模自転車道地点遺跡	第19号住居址	4・6・8	文献107
＃	第22号住居址	5・7・9・11・12・14・18・19	
＃	第24号住居址	13・16	
＃	第25号住居址	10・15・17	

国鉄貨物基地遺跡 20～26 文献55

四ツ屋遺跡（清野小学校旧蔵）30 文献77・93

＃	第17号住居址	32・40・42・48・57～59・65・77	文献108
＃	第24号住居址	34・36・55・67・70・82	
＃	第25号住居址	72	
＃	第26号住居址	54	
＃	第27号住居址	38・45	
＃	第28号住居址	41・46・50	
＃	第30号住居址	33・35・43・53・76・86	
＃	第31号住居址	83	
＃	第32号住居址	75	
＃	井戸址3	74	
＃	包含層	27～29・31・37・39・44・47・49・51・52・56・60～64・66・68・69・71 73・78～81・84・85・87・88	

○神楽橋遺跡、国鉄貨物基地遺跡、四ツ屋遺跡（清野小学校旧蔵）出土資料は笹沢浩氏原因により、その他は各報告書原因に基づいた。

○四ツ屋遺跡出土資料には弥生時代末葉から古墳時代初頭に至る段階、いわゆる「御屋敷式」期所産の資料が含まれているが、本集成においては箱清水式の末期的様相として把握した。

○掲載した資料は全て長野市立博物館において保管されている。

图 版



箱清水遺跡周辺の地形（昭和55年撮影）



遺跡遠景



調査地近景



試掘調査



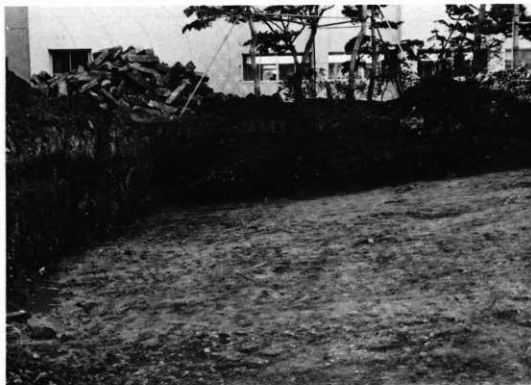
試掘時遺構検出状況



調査区表土除去



調査区全景



調査区南壁の土層断面



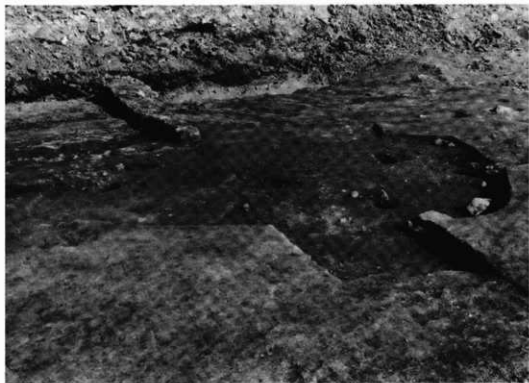
断面接写



住居址及び旧第3校舎基礎



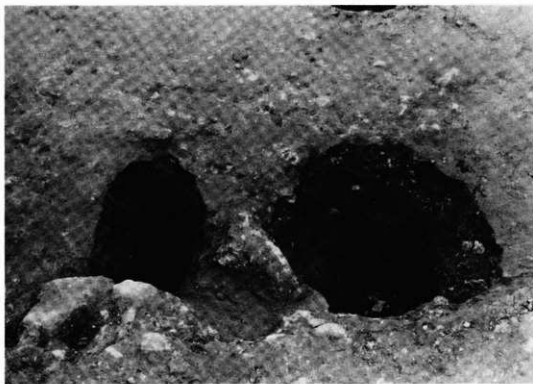
住居址（東より）



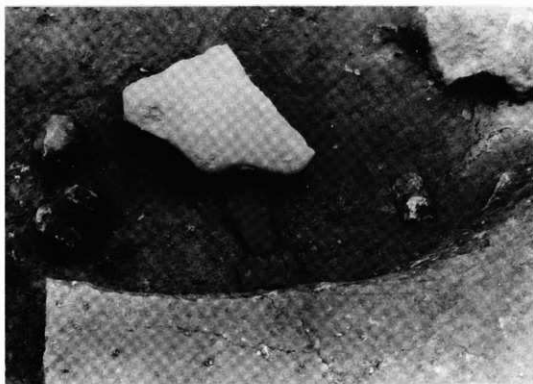
住居址（西より）



住居址柱穴及び竈



住居址入口部分ピット



住居址内遺物出土状況



調査スナップ

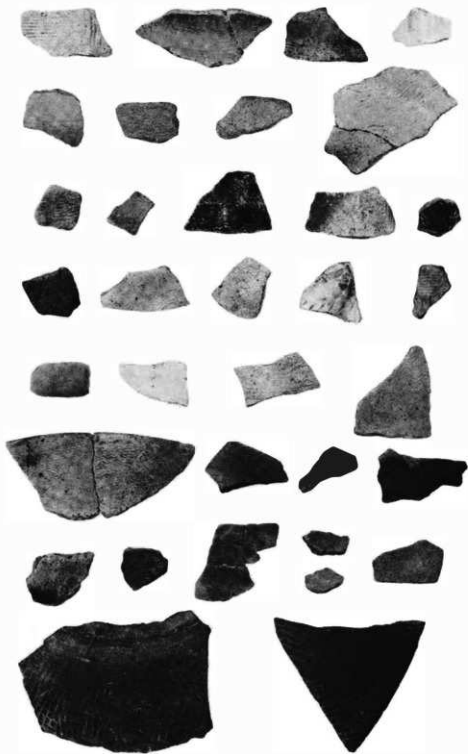


長野高女造成工事（明治34年）



長野高女





出土遺物(2)



1



2



3



4



1



2



3



4

出土遺物(3)

- 長野市の埋蔵文化財
- 第1集 『信濃長原古墳群』
 - " 第2集 『浅川西条』
 - " 第3集 『中村遺跡』
 - " 第4集 『塩崎遺跡群』
 - " 第5集 『塩崎遺跡群(2)』
 - " 第6集 『三輪遺跡—付水内生一元神社遺跡』
 - " 第7集 『田中沖遺跡』
 - " 第8集 『篠ノ井遺跡群』
 - " 第9集 『四ッ屋遺跡(第1～3次)』
『徳間遺跡』
『塩崎遺跡群(3)』
 - " 第10集 『湯谷古墳群』
『長礼山古墳群』
『駒沢新町遺跡』
 - " 第11集 『箱清水遺跡』
『大峰遺跡』
『大清水遺跡』
 - " 第12集 『浅川扇状地遺跡群
—牟礼バイパスA・E地点遺跡—』
 - " 第13集 『浅川扇状地遺跡群迎田遺跡』
『川田条里的遺構』
『石川条里的遺構』
 - " 第14集 『石川条里的遺構(2)』
『上駒沢遺跡』

長野市の埋蔵文化財第15集

箱 清 水 遺 跡 (2)

昭和59年3月10日印刷

昭和59年3月25日発行

編 者 長野市緑町1613

発 行 長野市教育委員会

印 刷 長野市中越293
ほおずき書籍(株)